

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第123集

牧野小山遺跡

2012

岐阜県文化財保護センター

まき の こ やま
牧 野 小 山 遺 跡

2012

岐阜県文化財保護センター

序

美濃加茂市は岐阜県の南部に位置し、清らかな水が流れる豊かな自然に恵まれた中にあります。古くから交通の要衝として、陸上では中山道の宿場町として栄え、河川では中世以来木曽川運材の中継地点として重要な役割を果たしてきました。また、木曽川・飛騨川によって形成された河岸段丘上には、原始より数多くの遺跡が所在し、これまでの発掘調査からこの地に生活した人々の痕跡が確認されています。

今回、発掘調査を行った牧野小山遺跡は、木曽川と飛騨川の合流点内側に所在し、過去に3度の発掘調査が実施されており、縄文時代から古代までの住居跡などが見つかり、当時の人々が集落を営んでいたことが報告されています。

今回の調査では、縄文時代の焼礫集積遺構1基、縄文時代中期の竪穴住居跡6軒、土坑などを発見しました。縄文時代中期の竪穴住居跡は切り合って検出され、うち2軒は建て替えを行っており、この地に定住していた様子がうかがえます。遺跡の中における縄文時代中期の遺構の広がりが明らかになり、とても貴重な発見となりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、多大な御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、美濃加茂市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

平成24年2月

岐阜県文化財保護センター

所長 高橋 照美

例言

- 1 本書は、岐阜県美濃加茂市牧野・下米田町小山に所在する牧野小山遺跡（岐阜県遺跡番号21211-04443）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、平成22年度社会資本整備総合交付金事業・平成23年度公共地域自主戦略交付金事業（交通安全）に伴うもので岐阜県可茂土木事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに、発掘調査は平成22年度に、整理作業は平成23年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は第1・2章、第3章第1・2節を野々田が、それ以外を近藤が行った。また、編集は近藤が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用、現場管理、掘削、測量などの業務は、株式会社イビソクに委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、株式会社イビソクに委託して行った。
- 8 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）
長屋幸二、藤村俊、美濃加茂市教育委員会
- 9 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用している。
- 10 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2006『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 11 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法と経過.....	3
第2章 遺跡の環境.....	5
第1節 地理的環境.....	5
第2節 歴史的環境.....	7
第3章 調査の成果.....	11
第1節 基本層序と遺構確認面.....	11
第2節 遺構概要.....	13
第3節 遺物概要.....	17
第4節 縄文時代の遺構と遺物.....	19
第5節 弥生時代以降の遺構と遺物.....	41
第6節 包含層出土の遺物.....	47
第4章 総括.....	61
報告書抄録	

挿図目次

図 1	遺跡位置図	2
図 2	グリッド設定図・地形測量図	2
図 3	美濃加茂市の河岸段丘の分布図	5
図 4	周辺遺跡位置図	9
図 5	基本層序図	12
図 6	遺構全体図	14
図 7	遺構断面形状図	15
図 8	堅穴住居跡配置図	16
図 9	SB 1出土遺物	19
図 10	SB 1遺構図(1)	20
図 11	SB 1遺構図(2)	21
図 12	SB 2遺構図	23
図 13	SB 3遺構図(1)	24
図 14	SB 3遺構図(2)	25
図 15	SB 3出土遺物	26
図 16	SB 4出土遺物	26
図 17	SB 4遺構図	27
図 18	SB 5出土遺物	28
図 19	SB 5遺構図	29
図 20	SB 6遺構図	30
図 21	S I 1出土遺物	31
図 22	S I 1遺構図	32
図 23	SK 1遺構図	33
図 24	SK 2遺構図	35
図 25	SK 2出土遺物	36
図 26	SK 4遺構図	37
図 27	SK 3・SK 5遺構図	38
図 28	SK 6・SK 7・SK 9遺構図	39
図 29	SK 8遺構図	40
図 30	SK 3~7出土遺物	40
図 31	SB 7遺構図	41
図 32	SK 11・SK 13・SK 17遺構図	43
図 33	SK 12・SK 13・SK 15・SK 16遺構図	44
図 34	SK 14・SK 19遺構図	45
図 35	SK 18・SK 20遺構図	46
図 36	SK 11・12・SK 14~16・SK 20出土遺物	46
図 37	包含層出土遺物(1)	48
図 38	包含層出土遺物(2)	49
図 39	包含層出土遺物(3)	50
図 40	遺構全体図分割図 1	51
図 41	遺構全体図分割図 2	52
図 42	遺構全体図分割図 3	53
図 43	遺構全体図分割図 4	54
図 44	遺構全体図分割図 5	55
図 45	遺物出土分布図	61
図 46	遺構変遷図	62
図 47	牧野小山遺跡堅穴住居跡分布	63

表目次

表 1	周辺遺跡一覧表	10
表 2	検出遺構一覧表	13
表 3	出土遺物点数一覧表	17
表 4	石器・石製品一覧表	18
表 5	S I 1裏重量別個体数	31
表 6	出土遺物一覧表	56

表 7	遺構観察表(1)	57
表 8	遺構観察表(2)	58
表 9	土器観察表(1)	59
表 10	土器観察表(2)	60
表 11	石器・石製品観察表	60

挿入写真目次

写真 1	調査前風景	3
写真 2	堅穴住居跡検出状況	4
写真 3	S I 1検出状況	4

写真 4	遺跡周辺地形	6
写真 5	実測作業風景	47
写真 6	掘削作業風景	47

写真図版目次

図版 1	調査区遠景・近景
図版 2	SB 1~SB 3土層・完掘状況
図版 3	SB 4~SB 7土層断面・完掘状況
図版 4	S I 1・SK 1・2・SK 12・NR 3等
図版 5	出土遺物：土器(1)
図版 6	出土遺物：土器(2)
図版 7	出土遺物：土器(3)
図版 8	出土遺物：土器(4)
図版 9	出土遺物：土器(5)、石器(1)
図版 10	出土遺物：石器(2)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

牧野小山遺跡（以下、当遺跡と記載する）は、岐阜県美濃加茂市牧野・下米田町小山に所在する。（図1）当遺跡は、木曾川・飛騨川の合流点内側の広大な段丘上に立地しており、周辺には縄文時代以降の数多くの遺跡が集中している。

今回の発掘調査は、主要地方道可児－金山線（県道七宗可児線）の道路拡幅工事に伴い実施した。牧野・下米田町地区では、地域住民が切望していた可茂特別支援学校が平成23年度に開設されることになったが、そのことによって周辺道路の交通量も多くなることが予想された。

当遺跡は、過去に試掘・確認調査を含め3度の発掘調査が行われている（図47参照）。昭和47年、この県道七宗可児線道路建設工事に伴い、岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会が遺跡の西端部分の発掘調査を実施している。この調査は道路幅に沿う長狭な調査区であったが、縄文時代・弥生時代・古墳時代後期～古代の竪穴住居跡などが確認され、遺構の南北方向の広がりが約300mに及ぶことが確認された。今回の調査範囲付近となる狭間地区（昭和47年の北調査区）では、中世の竪穴状遺構や集石土坑が検出されており、縄文時代早期～晚期、弥生時代中期の土器、石器が出土している。

平成7年度には、緑ヶ丘苗畠跡地利用事業に伴い、財団法人岐阜県文化財保護センター（平成21年4月1日に岐阜県文化財保護センターに改組）が岐阜県から委託されて試掘・確認調査を実施した。遺構の広がり・密集度・遺存状況確認のための対象面積が約10万m²に及ぶことから対象地域を大きく4区に区分し、トレーニングを任意に設定して調査を行った。全体的に苗畠耕作による搅乱は遺構確認面まで及ばず、5世紀中葉～9世紀後半に帰属する約100軒以上の竪穴住居跡を検出した。竪穴住居跡の展開状況から対象範囲全域に遺構が展開することが予想され、東海地方においても最大級の規模を誇る集落遺跡であることを確認した。今回の調査範囲付近のB区では竪穴住居跡36軒、溝10条、ピット4基、不明遺構2基を検出した。特に竪穴住居跡はB区の南東部に集中しており、弥生時代中期に属するものを5軒確認した。

平成8年度には前年度の試掘・確認調査を行った4区のうち、遺跡南東部のC区5,000m²を対象とした発掘調査を岐阜県から委託され、財団法人岐阜県文化財保護センターが調査を実施した。C区では竪穴住居跡39軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡などを検出した。遺構は4世紀末～9世紀が中心となるが、縄文時代から中世までの遺物が見られ、当遺跡が長期間居住地として機能していたことが判明した。

今回の県道拡幅部分の取り扱いについて、平成21年7月31日に岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会で検討され、過去の調査報告を踏まえ、490m²の本発掘調査が必要であると判断した。

発掘調査は、平成22年11月30日に文化財保護法第99条による埋蔵文化財発掘調査の報告（文財セ第140号）を岐阜県教育委員会に提出し、岐阜県教育委員会より埋蔵文化財発掘調査の報告についての通知（社文第38号の32）を受けて平成22年度に岐阜県文化財保護センターが実施した。

2 第1章 調査の経過

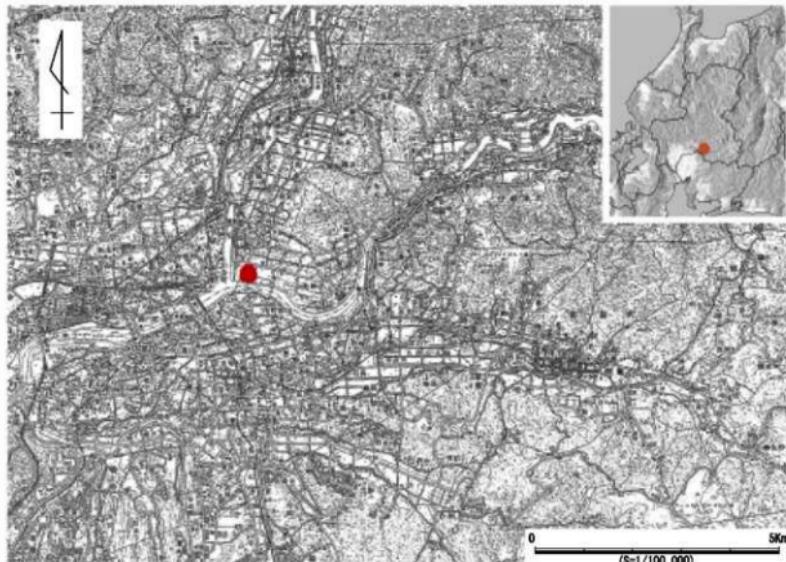


図1 遺跡位置図（国土地理院発行1:50,000地形図「美濃加茂」）



図2 グリッド設定図・地形測量図

第2節 調査の方法と経過

1 発掘調査の方法

発掘調査期間

平成 22 年 11 月 22 日～平成 23 年 1 月 21 日

調査地点の設定

本報告書では過去の調査地点について、1973 年の発掘調査区を島崎地点・挟間地点、1997 年の試掘地区を A～D 地点とし、その内 1998 年の発掘調査区を C 地点と呼称する。

グリッドの設定

本当遺跡の発掘調査は、世界測地系座標を基に 100×100 の大グリッドを北から南へ A・B とし、この大グリッドを分割して $5 \text{ m} \times 5 \text{ m}$ のグリッドを北から南へ A から T、西から東へ 1 から 5 とした。調査区画の呼称は大区画名称と北西角の杭番号を用いた（図 2）。

掘削作業

発掘調査に先立ち、過去の調査で確認した層位を基に、基本層序として I 層から IV 層までを設定した上で、11 月 22 日から重機による表土掘削作業を開始した。発掘調査区の現況は草地であり、遺構を傷つけることがないよう重機での掘削作業を慎重に行った。

表土掘削後グリッド杭を打設し、11 月 29 日から人力による掘削作業を開始した。遺物包含層（以下「包含層」と略称）の掘削、遺構検出、遺構掘削は基本的にジョレン・ねじり鎌等の小型道具を用いて実施した。遺構掘削は遺物の出土状況等の記録を写真と図面で作成し、最終的に遺構埋土をすべて取り除いた。遺構番号は検出順の通番とし、二次整理作業時に遺構別の通番として記載している。

実測等の作業

遺構の検出過程で、遺構の配置と切り合い関係を示す遺構全体配置図は、電子平板システムを用いて作成した。個別遺構の調査に当たっては、デジタル遺構実測システムにより平面図を作成し、断面図は手測り実測した図面をスキャニングによりデジタル化し、原則として $1/20$ の縮尺で図化した。調査区全体図は個別遺構の平面図を合成して作成した。記録写真は 35 mm カメラ、中判カメラ、デジタルカメラで撮影した。発掘調査区全体の景観写真は、平成 23 年 1 月 21 日にラジオコントロールヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

遺物取り上げ

出土遺物は、遺構内から出土した遺物はすべてトータルステーションによる 3 次元座標の測定をして取り上げた。また、遺構内にて遺物が集中して出土したものは、遺物出土状況図を作成し、必要に応じてエレベーション図を作成した。遺構以外の遺物は $5 \text{ m} \times 5 \text{ m}$ のグリッドごとに取り上げた。遺物の取り上げ層位は、包含層は基本層序、遺構内は遺構埋土断面で確認した層序を基本として取り上げた。



写真 1 調査前風景

4 第1章 調査の経過

2 調査の経過

現地での調査経過は下記の通りである。

- 第1週(11/22～11/26) 22日重機による表土掘削を開始。25日表土掘削終了。
第2週(11/29～12/3) 29日人力掘削開始。30日遺物包含層掘削開始。
第3週(12/6～12/10) 6日検出作業開始。8日遺構掘削開始。10日S I 1検出。
第4週(12/13～12/17) 14日SB 1検出。15日SB 2・3・4検出。17日SB 5検出。
第5週(12/20～12/24) 調査区中央付近に遺構がまとまっていることを確認。
第6週(12/27～12/31) 年末・年始の安全パトロール実施。
第7週(1/3～1/7) 6日SB 1、SB 2、SB 4完掘写真撮影。
第8週(1/10～1/14) 14日検出終了。14日SB 3完掘写真撮影。
第9週(1/17～1/21) 18日八賀晋指導調査員による指導。20日SB 5完掘写真撮影。
21日景観写真撮影。21日発掘調査作業終了。



写真2 樹立柱跡検出状況



写真3 S I 1検出状況

3 整理作業の経過

現場作業終了後、出土遺物の洗浄・注記等の一次整理作業は、平成23年2月1日から平成23年2月22日まで実施した。また、出土遺物の接合、実測、トレース、写真撮影、挿図・表の作成、本文執筆等の二次整理作業は平成23年度に実施した。

4 調査体制

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

センター所長	高橋照美（平成22・23年度）
総務課長	長屋忠司（平成22年度）、村瀬誠三（平成23年度）
調査課長	小谷和彦（平成22・23年度）
調査課第2担当チーフ	春日井恒（平成22・23年度）
担当調査員	野々田光則（平成22年度）、近藤正枝（平成23年度）
整理作業員	石原美帆、兼村清子、坂井田照子、知本俊美、丹羽香、橋本法子

第2章 遺跡の環境

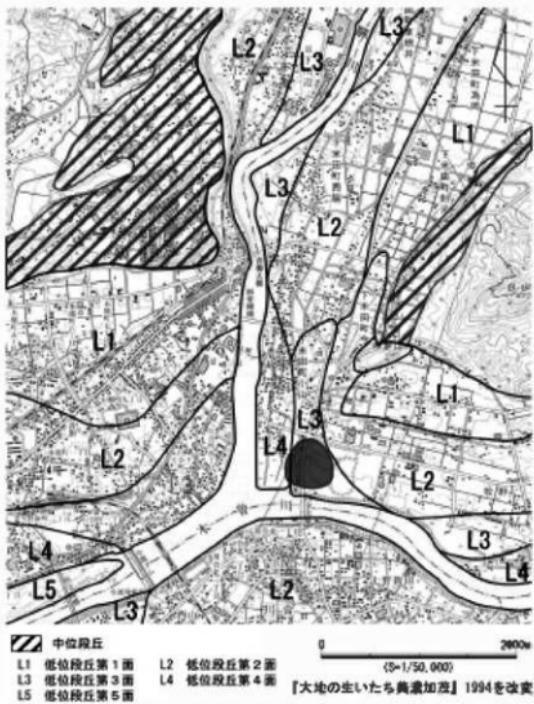
第1節 地理的環境

牧野小山遺跡が所在する美濃加茂市は、岐阜県の南端ほぼ中央に位置し、美濃高原の北東から南西方向に緩やかに傾斜していく地形を成す。市内は北部の山地（標高300mから500m）、中部丘陵地（標高140mから220m）、南部の河岸段丘（標高50mから100m）の平坦面と大きく3つに分けることができる。

市の大地の基盤を構成する岩石は今から約2億年前の地層でできている美濃帯中世層であり、この層は砂岩・泥岩・チャート・混在岩が複雑に重なり合い、主に北部の伊深地区や三和地区的山地に分布している。市のほぼ中央部、蜂屋地区や山之上地区などの丘陵地は、新第三紀中新世の瑞浪層群蜂屋累層と呼ばれる約2200年前の火山活動による火山堆積物である凝灰角礫岩・火山角礫岩・砂岩など

からなっている。南部の段丘は、木曾川や飛騨川の堆積と浸食活動によって形成された河岸段丘群から成り、約30万年前から3万年前までの間に形成されたと考えられている。この河岸段丘は高位段丘・中位段丘・低位段丘と段丘面を大きく3段に分けることができる。

低位段丘面はさらに細かく5面に细分でき、当遺跡は木曾川の現川床からみて3番目に低い段丘上（L3面）にあたる。美濃加茂市や可児市など木曾川沿いの遺跡付近の段丘面は川の流れに並行しておよそ東西方向に存在しているが、当遺跡の段丘面は、南北方向に長いことなどから、この段丘の平坦面が主に飛騨川の影響によって形成されたこ



とが窺える。この段丘面の大部分は砂礫で構成されているが、遺跡を包括する上部は雲母を多量に含む砂質シルトから成っている。

遺跡が位置する平坦面は、緩やかに南方へと傾斜する中で旧河道による地形の起伏がみられるが、木曾川の水面から比高が大きく、比較的安定した平坦面である。段丘崖よりまとまつた地下水が湧出していることや、現在も小川が流れている様相から水の確保も安易であり、生活するには極めて適した場所であったと考えられる。



1998年度空中撮影写真使用 図3 美濃加茂市の河岸段丘分布図参考

写真4 遺跡周辺地形

第2節 歴史的環境

美濃加茂市周辺は数多くの遺跡が知られており岐阜県下でも遺跡の密集度が高い地域の一つである。遺跡の多くは、木曽川沿いに広がる加茂野台地上の低位段丘上と中位段丘上立地し、当遺跡を含め周辺の遺跡は過去に発掘調査が実施してきた。

以下、当遺跡の3回の発掘調査の概要を記すとともに、発掘調査の成果が明らかになった周辺の遺跡について時代ごとに概観する。なお、本文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、表1、図4と一致する。

■当遺跡の調査について

1回目：当遺跡の西部

1973年、県道七宗可児線道路建設に伴う発掘調査（美濃加茂市教育委員会）

調査区を2つの地区（島崎地区と挟間地区）に分けて発掘調査が行われた。南から北にかけて貫通する道路工事のため、南北に長い調査区の設定であった。調査区全体から縄文時代中期の堅穴住居跡11軒、弥生時代中期の堅穴住居跡が12軒、古墳時代に属すると考えられる堅穴住居跡が8軒確認された。縄文時代においては、堅穴住居跡のほとんどが石圍炉をもつものであった。また、包含層から出土した遺物は膨大な量であり、木曽川中流域の縄文時代中期後半土器の編年研究において基礎資料となった。今回の調査区と隣接する狭間地区からは、縄文時代の堅穴住居跡は検出されていないが、約30点の押型文土器が出土していることから、この挟間地区東方に集落の中心があると考えられる。弥生時代においては、堅穴住居跡から貝田町式にあたる壺が出土しているが、これらの土器を全体的に観察すると、尾張地方の貝田町式を基本としつつも細頸壺の腹部凸帯の欠如がみられ、若干の点においてやや製作技法の差がみられることが指摘されている¹⁾。古墳時代においては、堅穴住居跡の間に若干の前後関係があるが、ほぼ5世紀末にまとまる。

2回目：当遺跡全域

1995年、緑ヶ丘苗畠跡地利用事業に先立つ遺跡確認のための試掘調査（財団法人岐阜県文化財保護センター）

この調査は1973年の発掘調査の成果に基づいて、遺構の遺存状況及び東方への遺跡展開の把握を確認することを主眼において実施した。試掘対象面積が約100,000m²に及ぶため対象区を大きく4ブロック（A～Dブロック）に分け幅2mのトレンチを任意に設定し調査を行った。この調査によりほぼ対象地域全面に遺構が展開する状況が確認できたが、中心を占めるのは5世紀中から9世紀後半にかけての堅穴住居跡であった。1973年の調査で多く報告されている縄文時代（中期）については散在的に遺物が出土したのみであり、遺構を確認することはできなかった。今回の調査区と隣接するBブロックにおいては、幅140～200cm、深さ50～80cm、長さ70mにおよぶ規模の大きい溝が確認され、遺物の出土状況から中世に属するものであることを確認した。

3回目：当遺跡南東部

1996年、緑ヶ丘苗畠跡地利用事業に伴う発掘調査（財団法人岐阜県文化財保護センター）

この調査は前年度、4つのブロックに分けて行った試掘調査のうち、C地区を対象にして調査を行った。検出した遺構は古墳時代後期から古代の堅穴住居跡39軒、掘立柱建物跡3棟であった。縄文時代、弥生時代、中世の遺構・遺物を除くと時期的中心は、4世紀末あるいは5世紀初から9世紀にかけ

けての遺構であった。特に6世紀前半に住居地としての機能を急激に広めるが、7世紀に入り縮小する傾向となったことが確認された。

■周辺の遺跡について

旧石器時代 この時代については、当遺跡の対岸に位置する可児市宮之脇遺跡（56）で平成2・3年に行った発掘調査によりナイフ形石器が6点、その他石刃状剥片等数点の石器が出土している。同じく対岸の川合遺跡群（62）では、ナイフ形石器、彫器等の旧石器の出土が確認されている。この他美濃加茂市内では、尾崎遺跡、北野遺跡、市橋北遺跡（いずれも図4の範囲外）などで、ナイフ形石器、細石刃などが確認されている。

縄文時代 富田清友遺跡（26）、為岡遺跡（33）、則光遺跡（25）、神明遺跡（4）、野笠遺跡（45）、中富遺跡（図4の範囲外）、二ツ塚遺跡（51）などが知られている。富田清友遺跡では、平成12年に発掘調査が実施され、早期の竪穴住居跡が2軒、煙道付炉穴が6基確認された。神明遺跡は昭和44年に発掘調査が行われ、中期後半の竪穴住居跡が4軒確認されている。野笠遺跡では、平成8・9年に行った発掘調査から、表情豊かな土偶や千点を超える打製石斧などが出土している。

弥生時代 野笠遺跡、今遺跡（15）、為岡遺跡などがあげられる。野笠遺跡では、東日本では最古となる遠賀川系の大型の壺型土器の口縁部が出土している²⁾。また、為岡遺跡では後期後半の方形周溝墓が10基確認されている。

古墳時代 為岡遺跡、今遺跡、針田遺跡（30）、東野遺跡（64）などでこの時代の集落跡が確認されている。また、当遺跡の北部に所在する稲荷塚古墳（27）は、円墳の直径が27m、高さ4mと大規模なものであることから、この下米田地区の中核的な存在であったと考えられており、この地区一帯を基盤とした豪族の存在が推測される。針田遺跡からは古墳時代前期の、宮之脇遺跡からも特殊器台が出土している。東野遺跡からは古墳時代前期4世紀前半の竪穴住居跡と大型掘立柱建物跡が見つかり、また、鉄鎌が竪穴住居跡から出土している。古墳時代前期の美濃加茂盆地の中心的な集落跡であったと考えられる。

古代 針田遺跡、富田清友遺跡、今遺跡などがあげられる。針田遺跡では、古墳～平安時代の竪穴住居跡50軒が確認されたほか、1091基の柱穴も確認されている。飛騨川から東に至る一帯が集落域であったことが考えられる。また、住居跡を中心に500点近い製塩土器が出土している。周辺の遺跡で製塩土器が出土しているのは、牧野小山遺跡C地点、尾崎遺跡、佐口遺跡、宮之脇遺跡、川合遺跡で、他地域と交流を考える上でも注目される。

加茂郡についての文献資料は断片的である。古代における加茂郡は『和名類聚抄』によるならば、埴生・美和・生部・井門・小山・米田・日理・神田・中家・川辺・志麻・駿家郷の12郷が記載されている。場所の比定については一致をみないが、〔米田郷〕・〔小山郷〕は上米田、下米田、牧野、小山地区におよそ比定されると考えられ律令制度下において注目される。また、『延喜式』神名帳によると、美濃国之内社39座のうち当郡内は加茂郡、県主、坂祝、大山、太部、阿夫志奈、神田、佐久太、多為、中山神社の9座が挙げられ著しく偏在していることが指摘されている。これは県主の祭祀的性格をもつ集団が当郡内にかなり多く存在していたことを反映するものであろうか。

中世・近世 針田・東坪之内・田中浦遺跡からは中世の竪穴住居跡や溝・土坑跡などが検出されている。上恵土城跡（69）では中世城館の掘立柱建物跡、井戸跡、城館跡を囲む溝跡が確認されている。

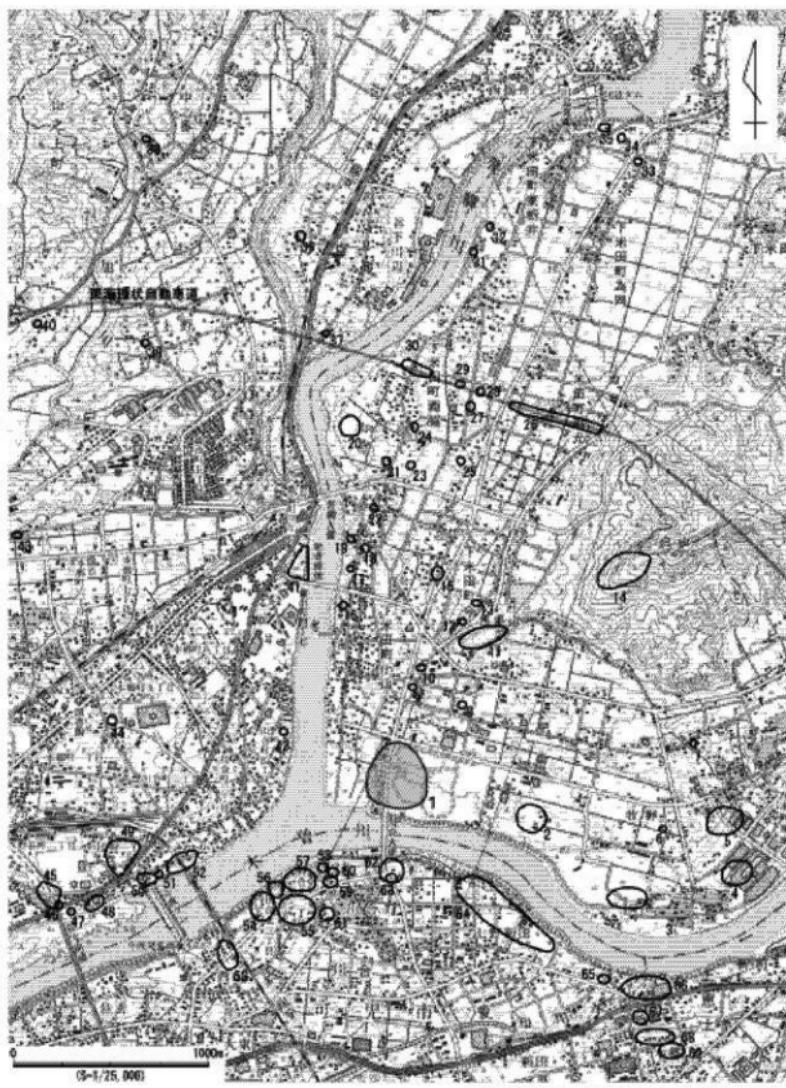


圖4 周辺道路位置図

表1 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代
1	牧野小山遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 古代
2	岐大農場遺跡	散布地	縄文
3	花之下遺跡	散布地	古代 中世
4	神明遺跡	集落跡	縄文 弥生
5	小貝戸遺跡	集落跡	縄文 弥生
6	小貝戸2号古墳	古墳	古墳
7	火塚古墳	古墳	古墳
8	下牧野古墳	古墳	古墳
9	廻間2号古墳	古墳	古墳
10	廻間1号古墳	古墳	古墳
11	馬串遺跡	城館跡	中世
12	坂下2号古墳	古墳	古墳
13	坂下1号古墳	古墳	古墳
14	白山山頂古墳群	古墳	古墳
15	今遺跡	集落跡	弥生 古代 (奈良)
16	小山觀音北遺跡	集落跡	弥生
17	長福古墳	古墳	古墳
18	長福遺跡	散布地	弥生
19	長福北遺跡	古墳	古墳
20	深渡A地点遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世
21	深渡B地点遺跡	集落跡	弥生
22	深渡C地点遺跡	集落跡	弥生
23	深渡D地点遺跡	集落跡	弥生
24	中尾敷古墳	古墳	古墳
25	則光遺跡	集落跡	縄文 弥生
26	富田清友遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世
27	稻荷塚古墳	古墳	古墳
28	田中浦遺跡	集落跡	弥生 古墳 古代 中世
29	東坪之内遺跡	集落跡	弥生 古墳 古代 中世
30	針田遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世
31	光徳寺古墳	古墳	古墳
32	光徳寺北遺跡	集落跡	弥生
33	為岡遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世
34	天満宮遺跡	散布地	弥生
35	追上遺跡	散布地	弥生
36	下川辺役所跡	城館跡	中世
37	天池古墳	古墳	古墳
38	藏前古墳	古墳	古墳
39	小陣出遺跡	散布地	縄文 古代
40	佐口遺跡	集落跡	古墳 古代 中世
41	下り遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 中世
42	川合東遺跡	集落跡	弥生
43	元禪隆寺跡	社寺跡	近世 (江戸)
44	切通遺跡	集落跡	弥生
45	野性遺跡	集落跡	縄文 弥生 古墳 古代 中世
46	赤池4号古墳	古墳	古墳
47	亀瀬古墳	古墳	弥生
48	赤池古墳群	古墳	古墳
49	川合川端遺跡	散布地	縄文 弥生 古墳
50	川合西古墳群	散布地	弥生
51	川合二ツ塚遺跡	散布地	縄文
52	川合西遺跡	散布地	弥生
53	西野遺跡	散布地	古墳
54	宮之脇1~12号古墳	古墳	古墳
55	次郎兵衛塚古墳群	古墳	古墳
56	宮之脇遺跡	散布地	旧石器 古墳 古代 中世
57	宮之脇東遺跡	散布地	古墳 古代 中世
58	川合福荷塚1号古墳	古墳	古墳
59	川合福荷塚2号古墳	古墳	古墳
60	川合福荷塚3号古墳	古墳	古墳
61	次郎兵衛塚1号墳	古墳	古墳
62	川合遺跡	集落跡	旧石器 縄文 弥生 古墳
63	東畠古墳	古墳	古墳
64	東野遺跡	散布地	縄文 弥生 古墳 古代
65	孤塚古墳	古墳	古墳
66	長畠古墳群	古墳	古墳
67	浦畠古墳	古墳	古墳
68	浦畠遺跡	集落跡	中世 近世
69	上惠土塚跡	城館跡	中世

*この表は岐阜県教育委員会2008『改訂版岐阜県遺跡地図』に準ずる。

浦畠遺跡(68)からは土壘、地境構、掘立柱建物跡、井戸跡を確認し中近世集落の変遷を解明する事例となっている。

以上周辺の遺跡の調査結果や当遺跡の調査から、この地域一帯が非常に長い期間にわたり、居住地として機能してきたことが考えられる。

注

- 1) 貝田町式の細型壺の製作技法又は施文技法は弥生土器としては極めて精巧なものであるが、牧野小山遺跡から出土した貝田町式土器は、精巧性を欠き、やや粗雑化する傾向がみられると指摘されている。
- 2) 口縁の形状から瀬戸内地域の東側に分布している初期段階のものと考えられ、畿内でもみられないとされている

第3章 調査の成果

第1節 基本層序と遺構確認面

遺跡の立地面は、木曽川・飛騨川が形成する河岸段丘上に位置する。現草地は段丘上の平坦面であるものの、北から南へむかって緩傾斜地となっており、遺跡中央部は東から飛騨川に向かって小川が流れている。今年度は南北に約105m、幅約4mと狭長な調査区である。調査区の周辺においては、北西に向かって緩やかに傾斜する地形となる。85.20mの等高線が調査区中央部からその南にかけてはしり、最も高い地点となる。

1998年調査のC地区においては、基本層序をI～Vまでに分けて記載しており、調査前に基本層序案を作成して調査を行った。調査の中で1998年のI・II層については今回、明確に分層することができなかつた。ただI層においては、Ia層 I b層と分層した。また、1998年のIII層にあたる層をII層、IV層にあたる層をIII層としている。今回はIV層を地山とした。

I a層…7.5YR2/1	黒色土	しまりなし	粘性なし	(表土)
I b層…10YR3/1	黒褐色土	黒褐色土	しまる	粘性ややあり
II層…10YR3/2	黒褐色土	ややしまる	粘性なし	黄褐色土のブロックを含む
III層…10YR2/2	黒褐色土	しまりなし	粘性なし	にぶい黄褐色土のブロックを含む (遺物包含層)

IV層…10YR6/6 明黄褐色砂質土 しまりなし 粘性なし (地山)

III層においては、1998年同様、II層から漸移的に変化し明瞭な境界は引けない状況であった。

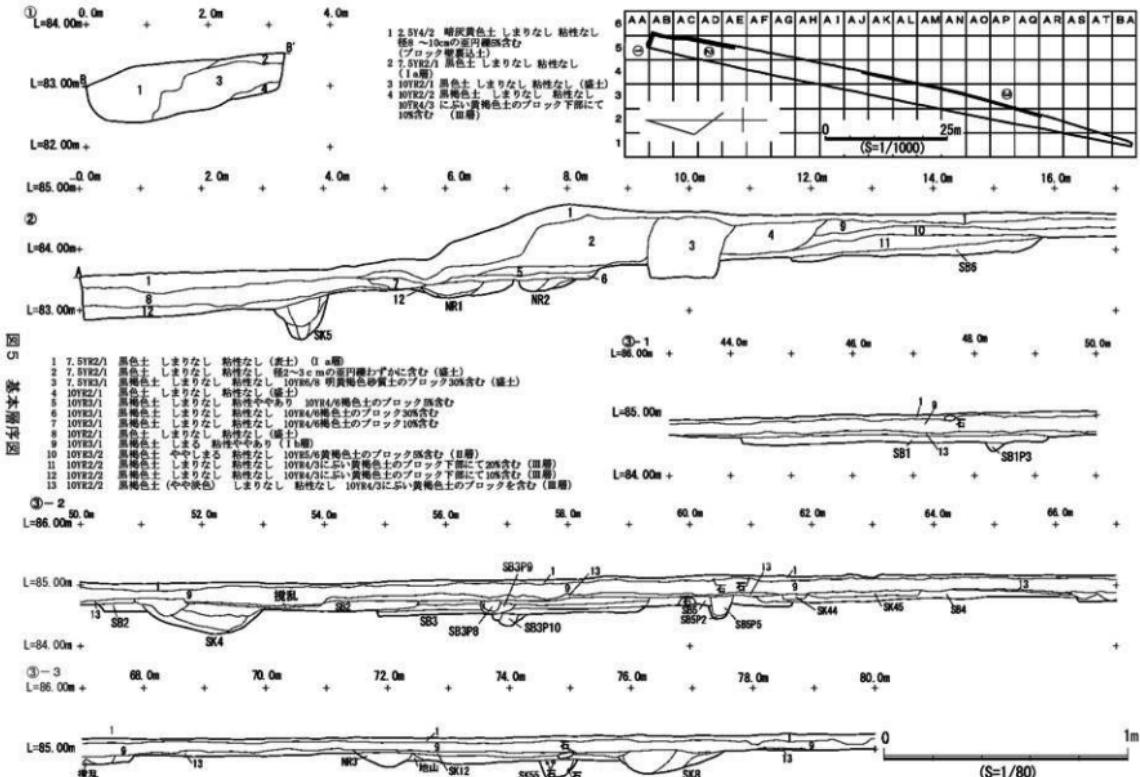
調査区北部の北壁においては、Ia層(表土)下に盛土が厚く堆積しており、その下にIb層、そしてII層がなくIII層となつた。調査区中央部付近の竪穴住居跡は、I層の下にIII層があり遺物をグリッドで取り上げた層はこのIII層であった。竪穴住居跡は、IV層上面で確認している。

調査区南部の東壁面においては、表土下が道路側のブロック堆積築時の裏込土が堆積しており、その下は地山の土となっていた。南部においては、南に向かって掘削をしていった結果、IV層地山内において、径20～30cmの人頭大の円礫を含む割合が多くなつた。

当遺跡は長良川の河岸段丘上に位置し、基盤となる面は段丘堆積層である。当遺跡のほぼ中央には東西方向に西に傾斜する谷があり、この谷によって大きく北地区と南地区に分けることができる。

明治時代の地籍図では、当遺跡北地区は林、南地区は畑として記載されている。

当遺跡の北地区には木の切り株が多く残り、北地区の更に北には池があり、池の水を段丘下に流すための溝があったとのことである。また北地区には神社への道が通り、道沿いには消防小屋があつたようである。北地区と南地区的間は宅地による搅乱を受け、発掘調査の対象外となっている。南地区に平坦面があるが、西側の段丘崖付近で地山が掘削され、大きく西へ傾斜する。近代にこの傾斜を埋め立てており、この土を外して中世の溝跡が検出されている。中世の溝跡は埋め立て前に搅乱を受けている。中世の時代には平坦面が現在より南西方向にさらに広がつていたようである。



第2節 遺構概要

1 遺構概要について

今回の調査では、IV層上面を遺構検出面とし、縄文時代中期から古代の遺構を検出した。検出した遺構は竪穴住居跡、焼窯集積遺構、フラスコ状遺構、土坑、溝状遺構等である。遺構の主な時代は縄文時代中期と弥生時代中期である。縄文時代中期の住居跡6軒は調査区のほぼ中央に位置する。縄文時代早期のものと思われる焼窯集積遺構はこれらの住居跡よりやや北に位置する。縄文時代のものと思われるフラスコ状遺構は調査区の北に位置する。弥生時代のものと思われる竪穴住居跡は調査区の北に、土坑は調査区の南に位置する。部分的にIb層下において擾乱された土坑を掘ったが、その中からも遺物は出土していた。

今回の調査区は遺跡の北西部の位置にあたり、遺跡の中心地（C地区地点あたりと思われる。図47参照）から離れているため、検出した遺構数は多くなかった。

遺構の種類と検出数は、表2のとおりである。柱穴規模の土坑もあるが、遺構内の堆積土中で柱痕跡を確認できず土坑として報告している。発掘調査時から整理等作業にかけて、竪穴住居跡内の柱穴以外で、掘立柱建物跡になりそうな同一規模の柱穴跡のまとまりや並びは確認できなかった。

なお、本報告書において、遺構の挿図や写真は、竪穴住居跡、土坑など、遺跡の性格を理解する上で必要なものを中心に掲載した。しかし、時期や性格が不明の土坑などは、図7の遺構断面形状図に基づき、遺構観察表（表7・8）に分類名を記載するのみとした。

（1）竪穴住居跡（SB）

平面形が方形になると思われるもので、上端が2m以上となる、またはなると想定する遺構とした。竪穴住居跡7軒のうち6軒を縄文時代の竪穴住居跡と考えている。1軒は弥生時代と考えたが、柱穴跡が検出されていないこと、出土遺物が少ないとから、大型の掘り込み土坑である可能性も高い。

SB3とSB5は基本層序の土層断面から、ほぼ同一位置での2時期の柱穴跡が確認でき、建て替えを行っている可能性が考えられる。

（2）焼窯集積遺構（SI）

人為的に焼けた石を集積した遺構を焼窯集積遺構とした。南部で検出したNR3・SK7・SK12の底部に見えている大小の円礎は加工痕・使用痕が見られなかつたため、段丘を形成したときに川の流れによって運ばれてきた礎と考えた。

（3）溝状遺構（SD）

平面形が細長い、または細長くなるだろうと想定できる人為的に掘られたと判断できる遺構を溝状遺構とした。

（4）土坑（SK）

平面に掘られた穴全般を土坑とした。溝状遺構及び焼窯集積遺構は除外している。また、近代のも

表2 検出遺構一覧表

遺構の種類	略号	検出 遺構数	挿図 掲載数
竪穴住居跡	SB	7	7
溝状遺構	SD	6	1
焼窯集積遺構	SI	1	1
土坑	SK	67	20
竪穴住居跡の柱穴	P	28	28
自然陥落	NR	3	0
合計		112	57

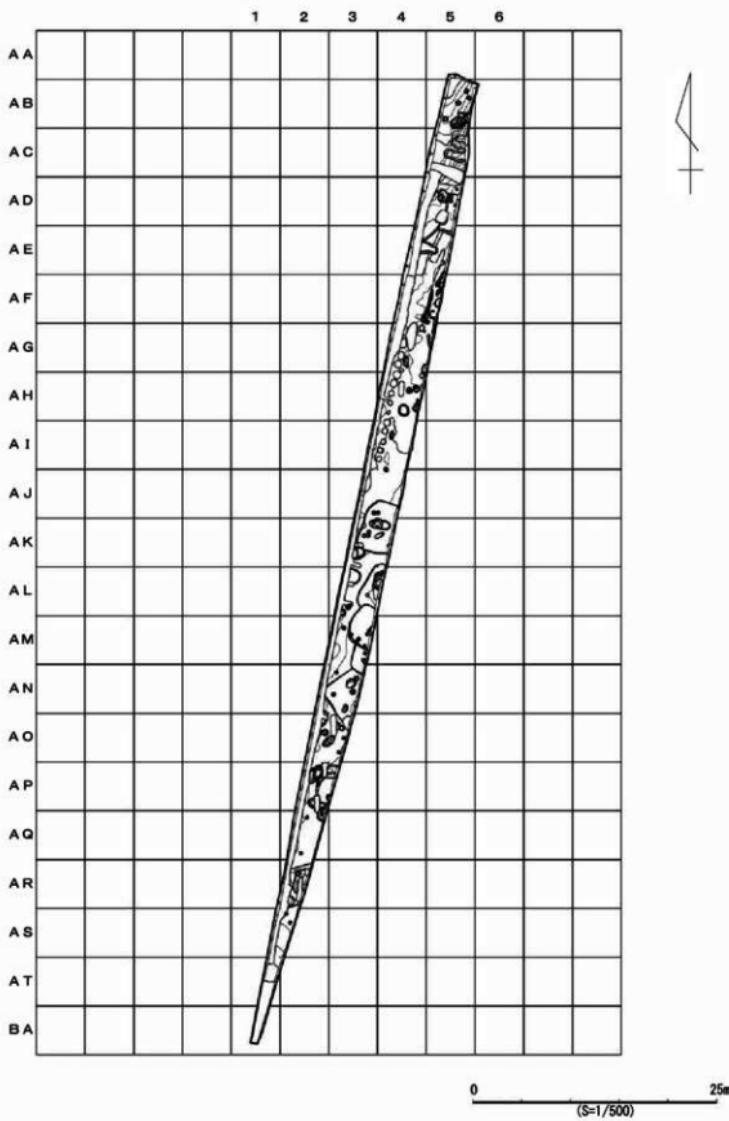


図6 造構全体図

のを含み擾乱としてはつきりするもの、近代の苗畑として利用されている頃の苗根の痕跡は擾乱とし、遺構からは除外している。

(5) 柱穴 (P)

土層で柱痕跡が確認できるものとした。

(6) 自然流路 (NR)

水が流れた痕跡は確認できなかったが、人為的に掘られていないと判断した遺構。

2 遺構一覧表について

①遺構埋土 分層した土層数と、堆積状況を次のように表示した。

A—埋土が單一層 B—ほぼ水平な堆積 C—中央がU字状に凹むような堆積

D—凹みが片寄った堆積 E—ブロック状に土層が入り込む堆積 F—その他

②断面形 断面の形状（図7 A～C）と、上面での短軸長と深さとの比（1～6）、底面（a～d）と壁面（1～5）の状況の4つの文字で表示した。

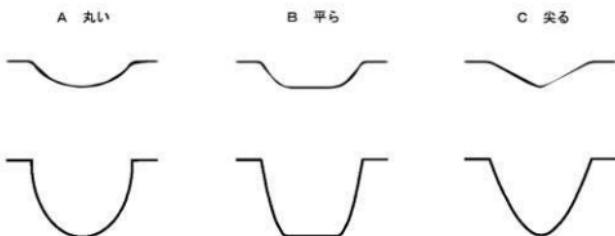


図7 遺構断面形状図

深さ／上面での短軸長 1 - 0.3 未満 2 - 0.3～0.7 未満 3 - 0.7～1.1 未満

4 - 1.1～1.5 未満 5 - 1.5 以上 6 - 不明

底面の状況 a - 丸いか平 b - 底が2段になる c - 底面が凸凹 d - 不明

壁面の状況 1 - 壁が開く 2 - 壁が直立に近い 3 - 壁面に段がある 4 - 袋状

5 - 不明

③平面形 () は短軸長に対する長軸長

A 1 円 (1) 2 楕円 (1.2 以上) 3 長楕円 (1.5 以上) 4 長楕円 (2 以上)

B 1 不整円 2 不整長楕円 3 不整長楕円 4 不整長楕円

C 1 正方形 (1) 2 長方 (1.2 以上) 3 長方形 (1.5 以上) 4 長方形 (2 以上)

5 多角形

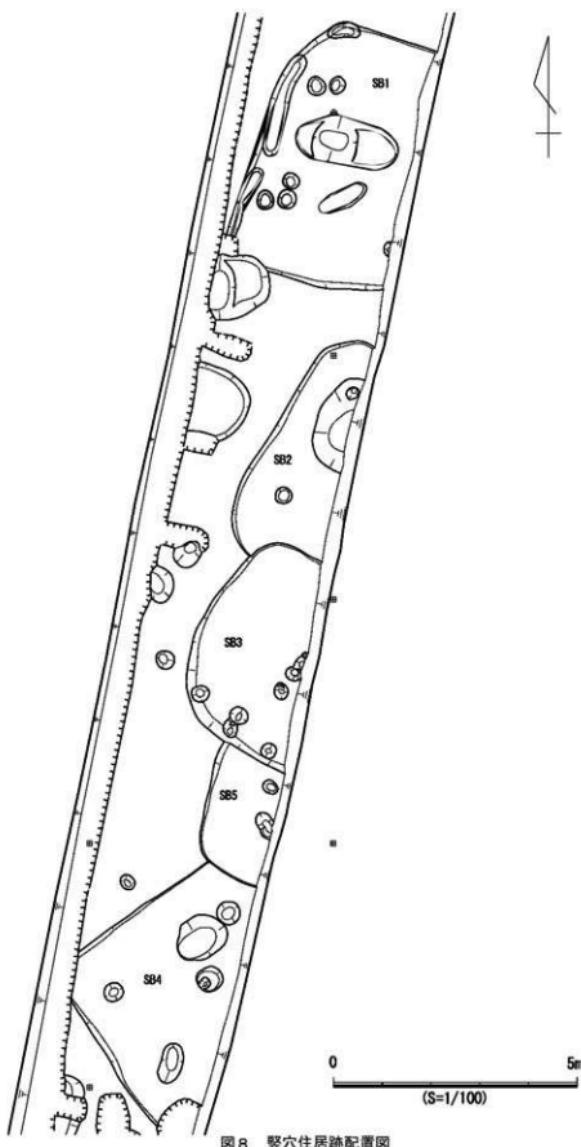
D 1 不整正方形 2 不整長方形 3 不整多角形

E 不定形 F 不明

④遺構の規模 単位はmであるが、()で示したものは、全形が確認できなかつたため、残存長を測ったものである。

⑤遺構の切り合い 「新>古」の関係を示す。

⑥法量・規模・遺構を示す場合はmを使用した。礫や遺物はcmを使用した。



⑦基本層序の記載はⅠ、Ⅱ、Ⅲ・・・とローマ数字を、遺構内の土層の記載は1、2、3層・・・と算用数字を用いた。

第3節 遺物概要

1 出土遺物数と掲載遺物数

出土遺物は、接合後の破片数で合計778点ある(表3)。そのうち、縄文土器が31.7%、弥生土器は7.2%、石器・石製品は27.4%である。縄文土器が全体の出土遺物数に対する割合が最も多く、次いで弥生土器、石器・石製品などが多い。また、その他の種別として須恵器や灰釉陶器などが出土しているものの、全体の出土遺物数に対する割合はいずれも9%以下である。土師器の出土点数は弥生土器・須恵器より多いが、重量はあまり変わらない。土師器は細片が多い。掲載遺物数は合計103点であり、接合後破片数の13%である。その抽出方法は、遺構出土遺物のうち、遺構の性格や時期等を検討する上で必要なものや、遺物包含層出土遺物のうち、遺跡の性格を端的に示すものや分類別の代表的なものを中心に選択している。

2 時期区分

本報告書における時期区分は一般的に使用されている時代呼称を用い、その年代観に対応する土器様式等は既存の研究に従った。また、本報告書における中世はおよそ平安時代後半から安土・桃山時代、近世はおよそ江戸時代に対応する。なお、出土した石器・石製品の器種、石材、時期などの指導を長屋幸二(岐阜県博物館)から得た。しかし、本書における記載内容の責任は編集者にある。

3 遺物概要

ここでは種別ごとの所属時期、分布、接合関係などについて記す。

(1) 縄文土器

出土点数は247点と他の遺物に比べて多い。そのうち、時期の推定できる資料は124点で縄文時代早期が16点、縄文時代中期が106点、縄文時代晚期が2点である。縄文土器は破片が多く、様式が分かることは無かった。その出土位置は調査区北と竪穴住居跡が検出された調査区中央である。遺構からの出土が127点で、Ⅲ層(遺物包含層)からの出土が113点である。1973年に報告された縄文土器には船元Ⅱ・Ⅲ式土器、里木Ⅱ式、咲烟式、加曾利EⅠ・Ⅱ式土器がある。今回出土した中期の土器もこれらの様式のものと思われるが細片であるため詳細は不明である。

(2) 弥生土器

出土遺物の所属時期は、弥生時代中期である。その出土位置は調査区中央と南である。縄文土器に比べると出土点数は少ない。1973年・1996年に報告された出土遺物にも貝田町式土器がある。

表3 出土遺物点数等一覧表

種別	接合後 破片数 (a)	重量(g)	全体に對 する割合 (%)	掲載 点数 (b)	b/a
縄文土器	247	2,487.8	31.7	49	0.20
弥生土器	56	501.8	7.2	21	0.38
土師器	151	582.6	19.4	3	0.02
須恵器	66	484.3	8.5	0	0.00
灰釉陶器	5	32.3	0.6	0	0.00
中世陶器	6	21.4	0.8	0	0.00
近世陶磁器	15	180.4	1.9	0	0.00
石器・石製品	213	2,339.2	27.4	30	0.14
金属製品	16	26.4	2.1	0	0.00
土製品	3	1.6	0.4	0	0.00
合計	778	6,657.8	100.0	103	0.13

(3) 土師器

古墳時代から古代の甕の胴部破片がほとんどである。その出土位置は調査区北と中央で、北から多く出土している。遺構からも出土しているが、ほとんどが包含層からの出土である。

(4) 須恵器

出土遺物の所属時期は、小破片のものがほとんどであるため推定すると7世紀後半から8世紀代のものと思われる。包含層・攪乱から多く出土している。

(5) 灰釉陶器

出土点数は5点と少なく、しかも大半は細片である。包含層から出土している。

(6) 近世陶磁器・近世以降の瓦

出土遺物の所属時期は、江戸時代で出土数が少ない。瓦は細片で江戸時代末期から明治時代のものと思われる。包含層と攪乱から出土している。

(7) 石器・石製品

出土遺物の所属時期は、縄文時代と弥生時代に分かれる。前者は尖頭器、石鎌、打製石斧、石匙などで、後者は直線刃石器などである。直線刃石器は野籠遺跡、尾崎遺跡にも出土例がある。遺構からはSK12から多く出土し、包含層からは調査区北から多く出土している。なお、石器の器種及び石材は表4のとおりである。

(8) 金属製品

出土遺物の所属時期は不明で近世以降と思われる。出土遺物15点で包含層から出土している。

表4 石器一覧表

石材	チャート	下呂石	サヌカイト	黒曜石	泥岩	ホルンフェルス	安山岩	砂岩	頁岩	総計
尖頭器		2								2
石鎌	1	2								3
石匙	1									1
スクレイパー	2	1								3
未製品	3	3								6
ビエヌ・エスキーヌ	5	2								7
U F	2			2						4
R F			1							1
石核		1								1
フレイク	76	56		3						135
チップ	8	1								9
直線刃石器					1					1
打製石斧				19	13					32
磨石・裁石				1		4	1			6
石鍬							1			1
砥石								1		1
総計		98	68	1	2	23	14	4	2	1 213

第4節 縄文時代の遺構と遺物

1 堅穴住居跡

今回の調査において、調査区中央から検出された堅穴住居跡から出土した縄文土器は、破片が多く様式が分かるものが出土していないが、おそらく中期と思われるものが多く出土している。特に中期の土器が多く出土しているSK2にSB1が切られており、SB3がSB2に切られ、SB5がSB3・SB4に切られ、SB6がSB7に切られている。SB3とSB5は図5の土層断面図からも柱穴の重複があり、SB3は3回のSB5は2回の建て替えが考えられる。SB1～5は縄文時代中期の遺構と考えているが、SB5<SB3<SB2となり、大きく3時期に分けられるようである。しかもSB3・SB5は建て替えもしており、縄文中期にこの地に定住していた痕跡となると考えられる。

SB1（遺構図：図10・11、遺物図：図9）

本遺構は、重機による表土掘削時において、土器がわずかであるが出土した。また、包含層掘削においても、この遺構の範囲となるAK3グリッド及びAK4グリッドからは土器が多く出土した。検出はIII層がほぼ0.06m堆積しており、その土を除去して、IV層上面で茶色が混じる黒色土の広がりを確認した。標高は84.61mから84.57mのほぼ平坦地で、その土の外周にプランをとった。掘形は方形を呈していると思われるが、東半分が調査区外となるため明確に確認することはできなかった。本遺構を切る土坑（SK2、SK3）の掘削を先に行つたが、縄文中期の土器がこの土坑内においては大量に出土した。

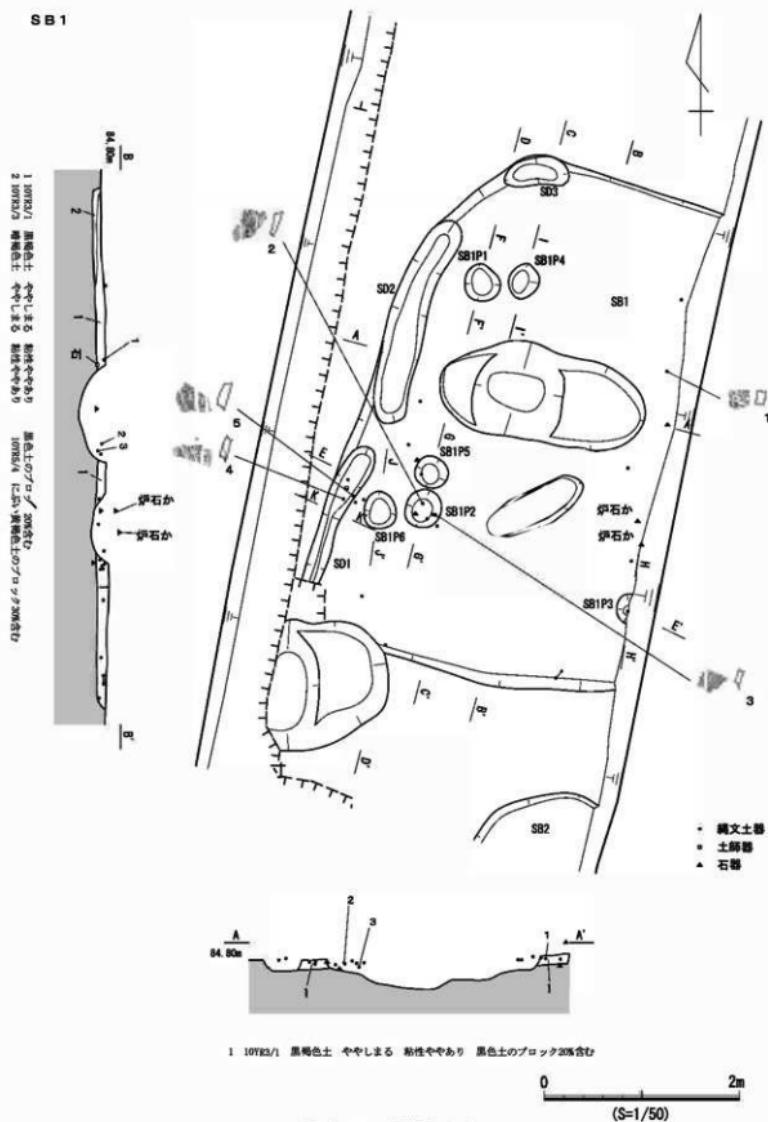
この遺構を掘り下げるにあたり、貼床などの観察を行ったが、硬化する面は確認できなかった。埋土中においては、炭化物や焼土などは混入していないかった。埋土は2層に分けたが、2層目は住居隅に流れ込んで自然に堆積したものと思われる。炉跡については位置的に炉跡があると思われる場所がSK3によって破壊されているため、確認できなかった。SK3からは礫や焼土などは出土していない。周溝については、この遺構を切るように溝状のSD1、SD2、SD3を検出したが、住居跡内隅に位置するため、周溝と考えた。底面は顕著な凸凹はなく平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。底面において、ピットを6基検出した。ピットはいずれも掘形が円形で、深さが浅い。また、土層観察の結果、柱痕跡は確認できなかった。いずれが主柱穴となるのか判断できないが、おそらくSB1P1、SB1P2、SB1P3と考えている。

出土遺物は、縄文土器が26点でその内の4点が早期、5点が中期、それ以外は時期不明の縄文土器である。他に土師器が1点、石器が3点出土している。この内の土器5点を掲載した。1は早期の押型土器、2～5は縦方向の沈線区画を持ち、2～4は沈線区画内に矢羽根状の沈線を施している。

本遺構の所属時期は、出土土器から縄文時代中期後葉と推定される。



図9 SB1出土遺物



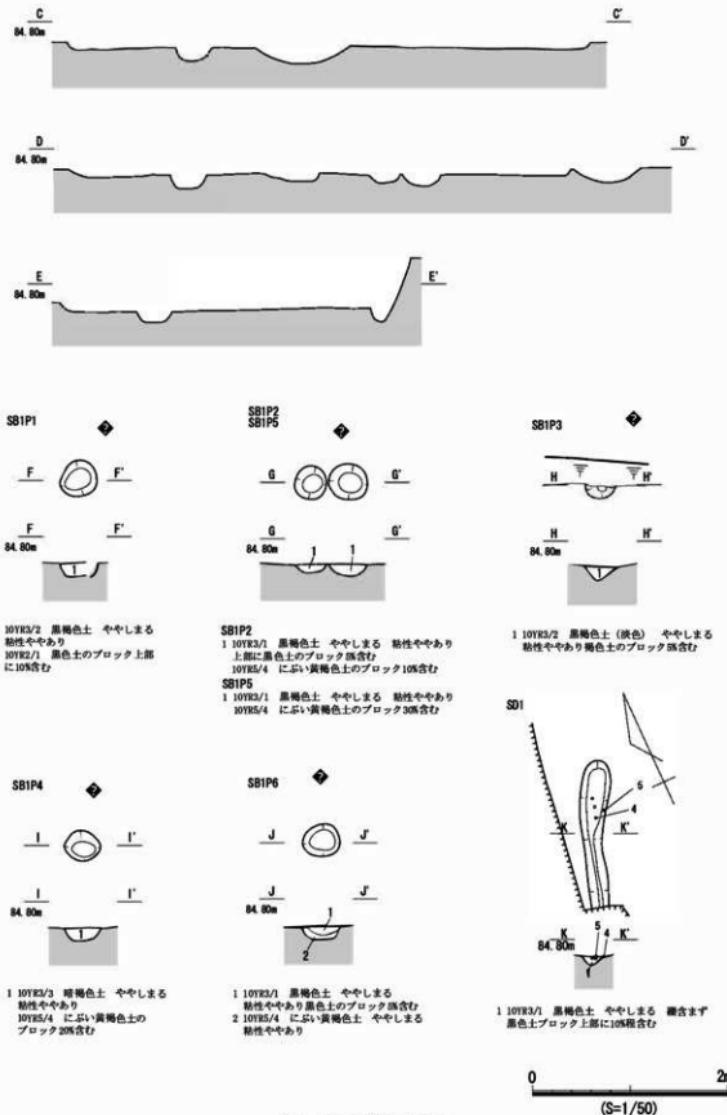


図11 S.B.1遺構図(2)

S B 2 (遺構図: 図12)

本遺構は、重機による表土掘削時において、土器がわずかであるが出土した。また、包含層掘削においても、この遺構の範囲になる A L 3 グリッド及び A L 4 グリッドから多くの土器が出土している。土器は縄文土器と弥生土器が混じる。

検出においては、III層がほぼ 0.05m 堆積している部分や搅乱の土を除去して、IV層上面で茶色が混じる黒褐色系の土が細かなブロックとして入る部分の広がりを確認した。標高は 84.75m から 84.67m のほぼ平坦地で、その土の外周にプランをとった。掘形は隅丸の方形を呈していると思われるが、東半分が調査区外となるため明確に確認することはできなかった。S B 3 埋土より明色であることから、S B 3 より新しいと考えた。

表面上硬化はみられなかった。埋土は2層に分かれる。ほとんどが1層の土で、2層目は住居隅に堆積している状況であった。掘削においては、徐々に下げていったが、硬化する面は確認できなかつた。また、炭化物や焼土が混入することもなかつた。周溝についても注意していたが、検出できなかつた。底面は平坦で、壁は外傾する。炉跡については、住居のおよそ中心となる位置が東側調査区外となることや、SK 4 の土坑に切られていることなどから、検出できなかつた。SK 4 の土坑からは縄文土器が数点出土していることから、これに切られているこの住居跡は縄文時代と考えている。完掘した底面より、S B 2 P 1、SK 4 の側面より S B 2 P 2 の土坑を検出した。いずれも浅く単層であるが、土坑の位置的な状況や住居跡の規模等からこの2基が主柱穴になる可能性があると思われる。

この遺構からは縄文土器片が1点、下呂石のフレイクが1点出土したのみであり、時代が不明である。この遺構を切っている SK 4 の遺物が縄文土器であるという点から縄文時代と考える。

S B 3 (遺構図: 図13・14、遺物図: 図15)

本遺構の範囲となる AM 3 グリッド包含側掘削において、炭化物や縄文土器が混入していた。グリッド内からは、石鏸、石錐などの石器も出土している。グリッド西側においては、弥生時代中期頃の土器が出土している。検出は、地山色の黄褐色土ではなく、やや暗い褐色系の土が広がっており、その土に黒褐色系土が細かなブロックとして入った。その外周にラインを引きプランを設定したが、東側が調査区外となるため、掘形全様は不明でプランは明瞭であった。ほぼ隅丸の方形状になると思われるため住居の可能性を考えて進めた。S B 2 よりやや暗色系であることから S B 2 より古いと考えた。表面上硬化はみられない。

1層を掘削した底面（ほぼ 0.05~0.07m 掘削した面）においてやや硬化する面が広がった。また、この底面において P 1 と P 3 の間辺りで炭化物（径 1~2cm）が混入するが、3か所程度であり、多くはなかつた。焼土の混入はない。2・3層においても、炭化物や焼土などの混入はなかつた。この面を貼床の可能性があると考えた。住居内中心付近においては石などが出土していない。このことも含め炉跡の検出ができなかつた。S B 3 P 9 付近では土坑が切り合うが、この付近が炉跡であった可能性もある。1層掘削後の底面が S B 2 完掘後の底面とほぼ同じ高さとなり、その面の高さで S B 3 のプラン延長部分を検出した。1層底面は平坦、この面で S B 3 P 1・P 2・P 3・P 9 の土坑を検出した。主柱穴は S B 3 P 1、S B 3 P 2 の可能性を考える。S B 3 P 1 は深く柱穴と考えてよいが、S B 3 P 2 は浅いため、建て替え後の柱穴の可能性が高い。また、調査区東壁の土層断面をみると S B 3 P 8、S B 3 P 9、S B 3 P 10 がほぼ同じ位置で床面の高さを異なつてあるのが確認できる。こ

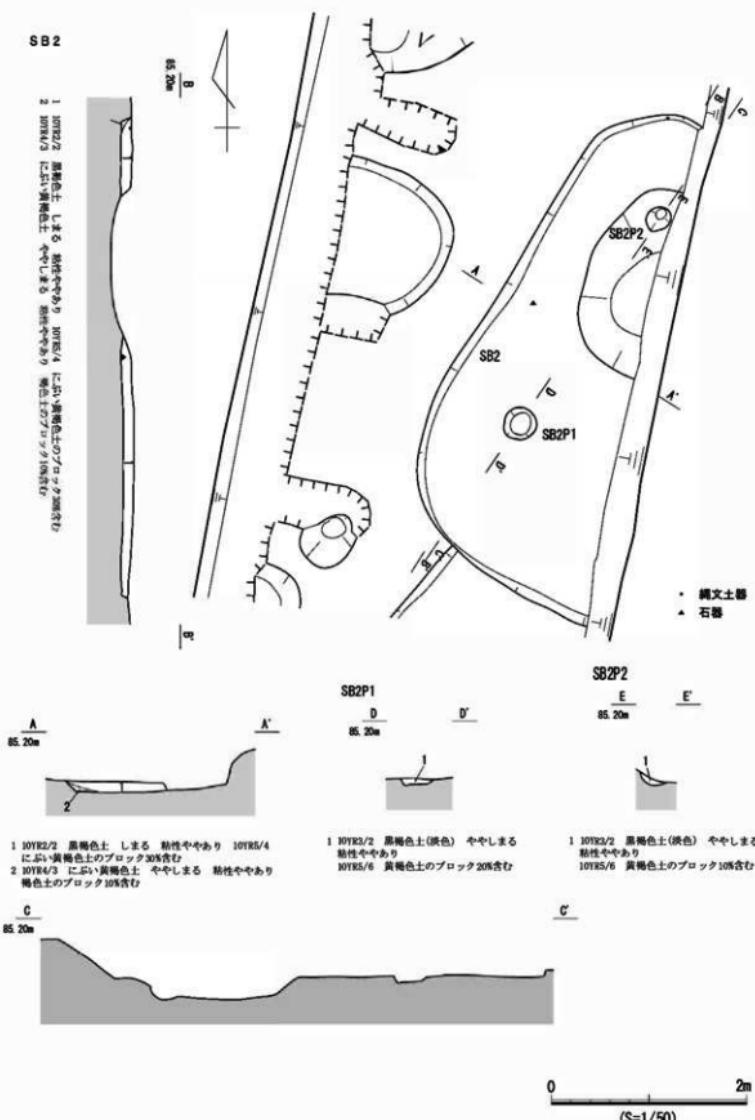


図12 SB 2 遺構図

S B 3

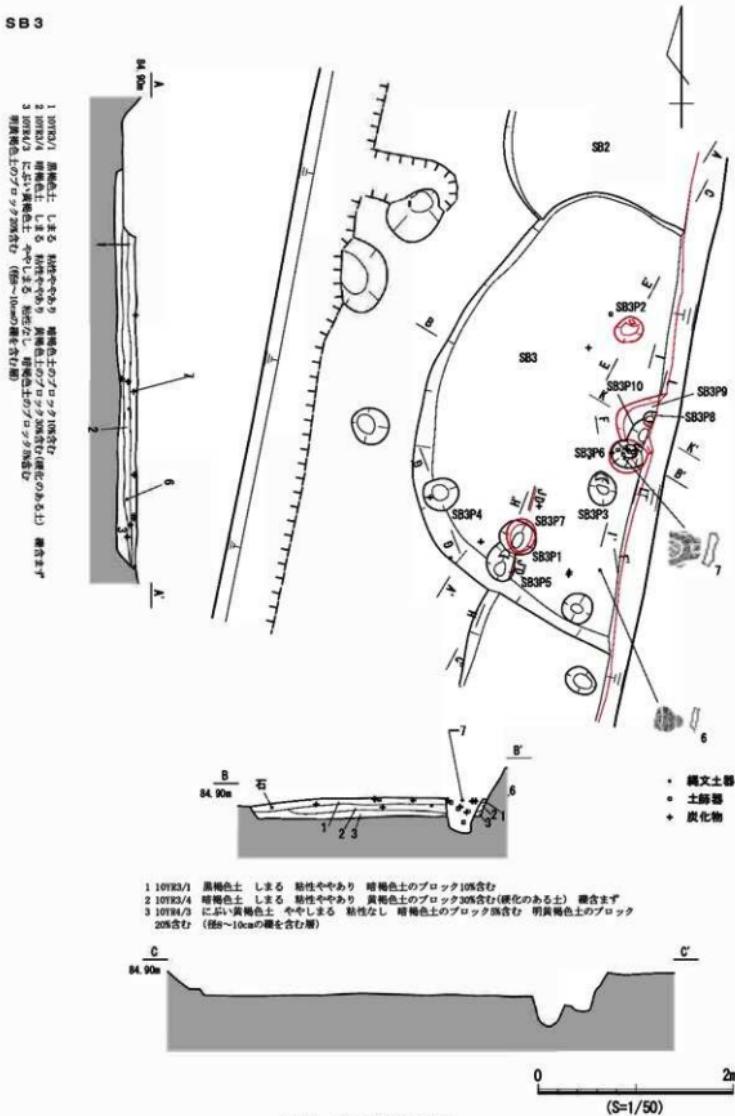


圖13 SB3 電路圖 (1)

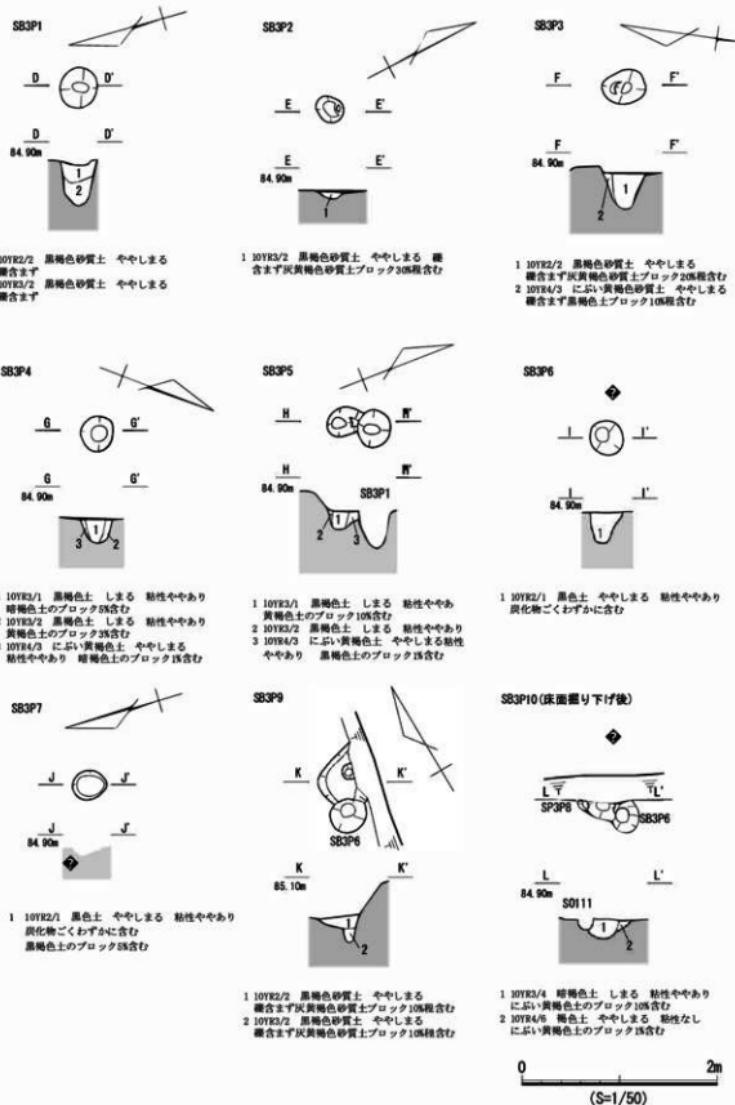


図14 SB 3造構図(2)

のことからほぼ同じ位置での建て替えが考えられる。

遺物は縄文土器小片が4点、土師器が1点出土した。SB 3 P 6からは土師器の小片が4点出土している。この内の縄文時代中期の土器と思われる2点を掲載した。本遺構の所属時期は、出土土器から縄文時代中期後葉と推定される。炭化物が他の住居跡と比べると多く出土している。

SB 4 (遺構図:図17、遺物図:図16)

I b層、部分的にIII層を除去した下から検出した。調査区中央部、AN 3グリッド内、標高84.87mから84.73までのほぼ平坦地に位置する。地山の色(黄褐色土)に近い土が広がる中で、黒褐色系の土が細かなブロックとして斑点状に広がる部分がある。その斑点状の外周にラインを引きプランを設定した。住居跡の可能性を考えて調査を進めた。

西・東側ともに調査区外や擾乱によって切られるため掘形の全様は不明であるが、ほぼ方形になると思われる。他の住居跡の規模に比べると大きい。埋土は単層であり、埋土中からは縄文土器が出土している。しかし、炭化物や焼土の混入はみられなかった。徐々に下げていったが硬化する面はなかった。底面は平坦で、壁は外傾する。住居の中心部分は調査区外にあたるため、炉跡の検出はできなかった。SK 46・47・48はプラン設定時に確認できなかつたが、土層ベルトを観察した結果、この遺構より新しい土坑ということが判明した。そのため、この住居跡より先に掘ったが、すでに下げているため、上端形状は推定ラインとした。

底面からは、SB 4 P 1、SB 4 P 2の2基を検出した。主柱穴の可能性を考えている。いずれも浅い土坑であるが、SB 4 P 2は断面において柱痕跡がわずかに窺える。北側の縄文時代と考えている住居跡とは規模の違いや軸の方向が異なる。

出土遺物は縄文土器が5点、石器が2点、土師器が2点、須恵器が1点である。この内、縄文時代中期と思われる土器3点を掲載した。本遺構の所属時期は、出土土器から縄文時代中期と推定される。

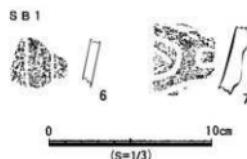


図15 SB 3出土遺物



図16 SB 4出土遺物

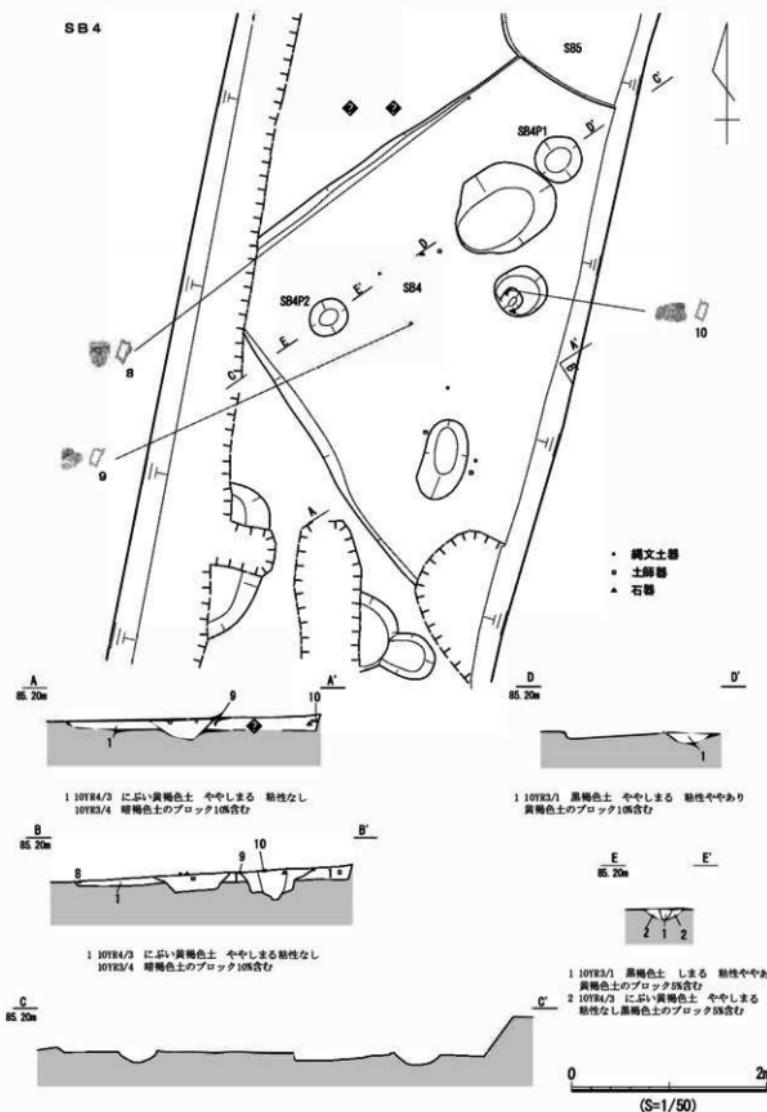


図17 SB 4 遺構図

SB 5 (遺構図: 図19、遺物図: 図18)

本遺構は調査区中央部、AM 3 グリッド内、標高 84.75m から 84.70m のほぼ平坦地に位置する。本遺構の範囲になる AM 3 グリッド 包含側掘削において、土に炭化物が混入していた。攪乱と SB 4 の間にやや茶色（淡い）系の土が広がる部分があった。その外周にラインを引きプランを設定した。黒褐色系土が細かなブロックとしても入る。

平面形は、東側が調査区外になることや、他の遺構に切られていることなどから全様ははっきりしていないが、おそらく隅丸の方形状になると思われる。プラン設定後、徐々に下げていったが、硬化する面はなかった。また、埋土は 2 層に分けた。2 層目は掘形隅に上の土が流れ込み自然堆積したものと思われる。埋土に炭化物や焼土などの混入もなかった。底面は平坦、壁は外傾する。ほぼ地山となつた高さにおいて、径 5 ~ 8 cm ほどの亜円礫が地山に埋まっている状態であった。礫などに被熟痕跡や加工痕などの様子はみられなかった。炉跡などはない状況であった。位置的には調査区外になると思われる。底面から 3 基の土坑を検出したが、主柱穴と考えられるのは、SB 5 P 1、SB 5 P 2 である。

遺物は埋土から縄文土器が 2 点、下呂石製のスクレイバーが 1 点出土している。縄文土器は細片で時期は不明である。出土遺物より遺構の時期を縄文時代と考える。

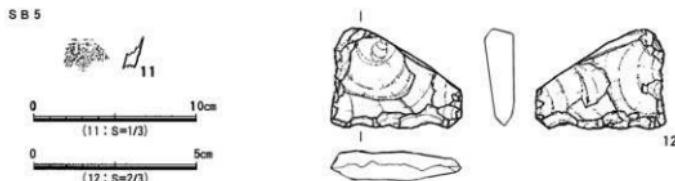


図18 SB 5 出土遺物

SB 6 (遺構図: 図20)

調査区北部、AD 5 + AE 5 グリッド内、標高 84.16m のやや西側に傾斜する位置にある。本遺構の西側に位置する、SB 7 完掘後の側面や攪乱の側面などから、褐色系の土がIV層上に細かなブロックとして堆積していることから、この土を平面的に確認してプランを設定した。平面形は SB 7 に西側が切れ、東側は調査区外になるため不明だが、方形状になると考えた。埋土は単層、底面はやや凸凹するが平坦である。壁は外傾する。

この遺構を検出すると同時に、SB 6 P 2、SB 6 P 3 のピット 2 基を検出した。それ以前には対になるピットは SB 6 P 1 を完掘していた。主柱穴については、おそらく SB 6 P 1、SB 6 P 2 が主柱穴となるかもしれないが、断定はできない。底面においては、ピットの検出はなかった。

出土遺物は泥岩のフレイク 1 点である。SB 6 を切る SB 7 からは弥生時代中期の土器が 1 点、打製石斧が 2 点、土師器 2 点、須恵器 1 点が出土しており、SB 7 を弥生時代の遺構と考えた。遺構から出土している遺物は少ないが、包含層から出土している遺物は、AD 5 II 層からは石器 5 点、土師器 4 点、須恵器 3 点、AD 5 III 層からは縄文土器 1 点、石器 5 点、土師器 5 点、須恵器 1 点、AE 5

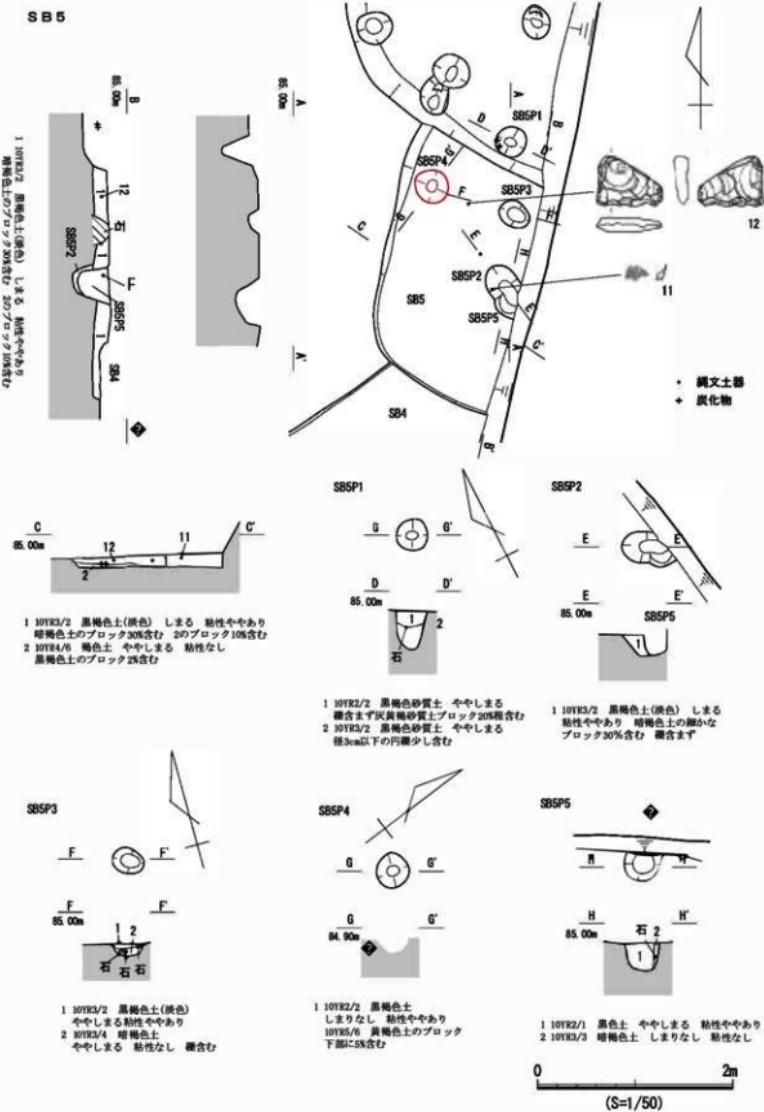


図19 SB 5遺構図

II層からは石器20点、土師器6点、須恵器4点、近世陶磁器1点、金属製品4点、AE5Ⅲ層からは石器8点、土師器2点、須恵器5点、金属製品1点である。包含層から出土している須恵器・灰釉陶器・陶磁器は細片で、近代以降の擾乱を受けていると想る。陶器が細片であるのに對して石器が打製石斧、UF、下呂石のフレイク、磨石など点数が多く出土しており、このことからSB6は縄文時代の遺構である可能性が高いと思われる。

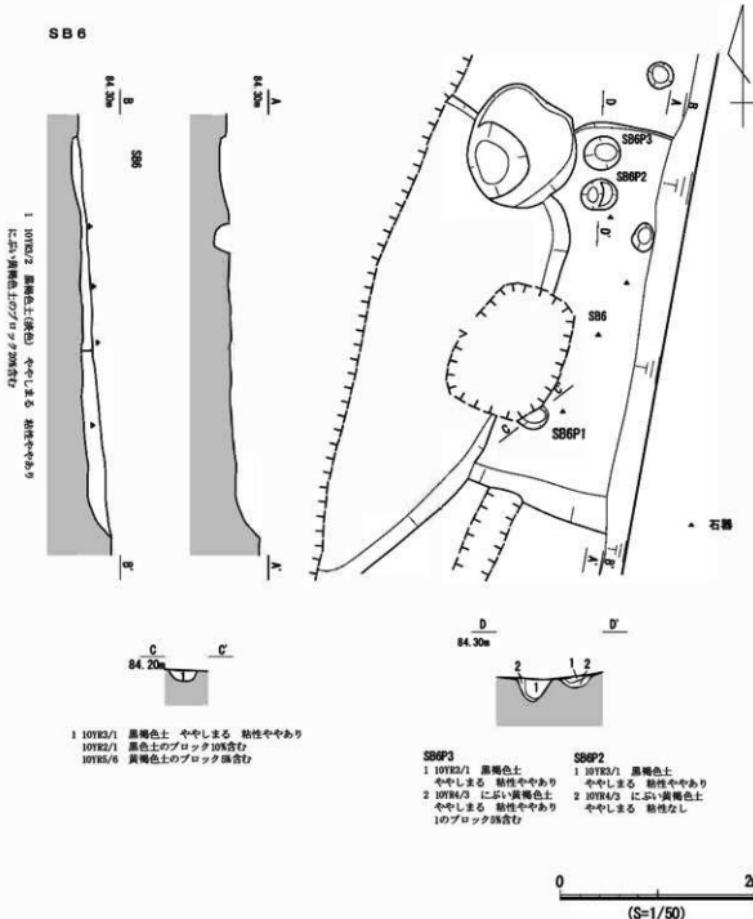


図20 SB6遺構図

2 焼礫集積遺構

今回の調査において、縄文時代早期の土器が出土しているのはSB1から4点、SK1から2点、SK17から1点、SP9から1点AJ4III層から1点で調査区北・中央・南から少しづつ出土している。焼礫集積遺構からは石器を1点確認したのみで出土遺物からは早期といいきれないところである。

S I 1 (遺構図: 図22、遺物図: 図21)

本遺構は調査区中央部や北、AH4グリッド内、標高84.50mの平坦地に位置する。

包含層掘削において、円礫がまとまっていることを確認し、検出時、IV層上面において、礫がまとまっている部分を明瞭に確認した。掘形のプランも検出できた。土をだんだん下げていくとその礫のまとまりがはっきりしてきたため、集石遺構という可能性を確認した。上部の礫はほぼ拳大でまとまっており、割れている状態のものが多い。また、被熱痕跡のある礫が多かった。他に切り合う遺構は確認できなかった。この時点で炭化物や焼土は無かった。被熱痕があることなどから、焼礫集積遺構とした。

埋土掘削については慎重に進めて行った。断面を観察後2層に分けた。1層において礫を含むが2層は礫を含まない。2層はややしまりはあるが、粘性がない砂質土であった。埋土中、炭化物・焼土を含むような状況は確認できなかった。平面形は円形状となる。規模は直径約1.1m、深さ0.3mである。土器は皆無で、磨石1点出土している。遺物が出土していないことから時期についてははっきりしないが、遺構の規模や焼礫の大きさから縄文時代早期前半のものと考える。また、1973年の調査において、この遺構の約10m西においては、山形押型文土器が出土し、今回の調査でも16点の縄文時代早期の土器が出土している。礫は201個（接合前は216個）、平均重量は188.21gであった。割れて接合できた礫が44個（22%）ある。被熱痕跡のある礫の個数は127個（63%）である。割れも被熱痕跡も無い物は35個（17%）である。礫のほとんどは濃飛流紋岩184個（92%）でこれ以外には砂岩が7個、泥岩5個、チャートが2個、花崗岩1個、凝灰岩1個、斑頬岩1個である。すべて川原で拾えるような自然礫である。積んだ礫が北の方向に崩れているように見える。

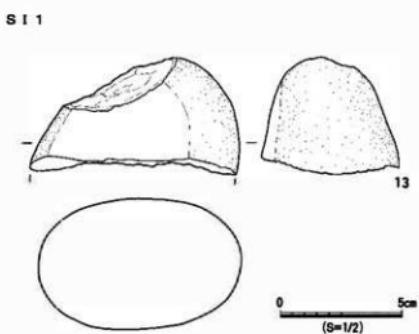
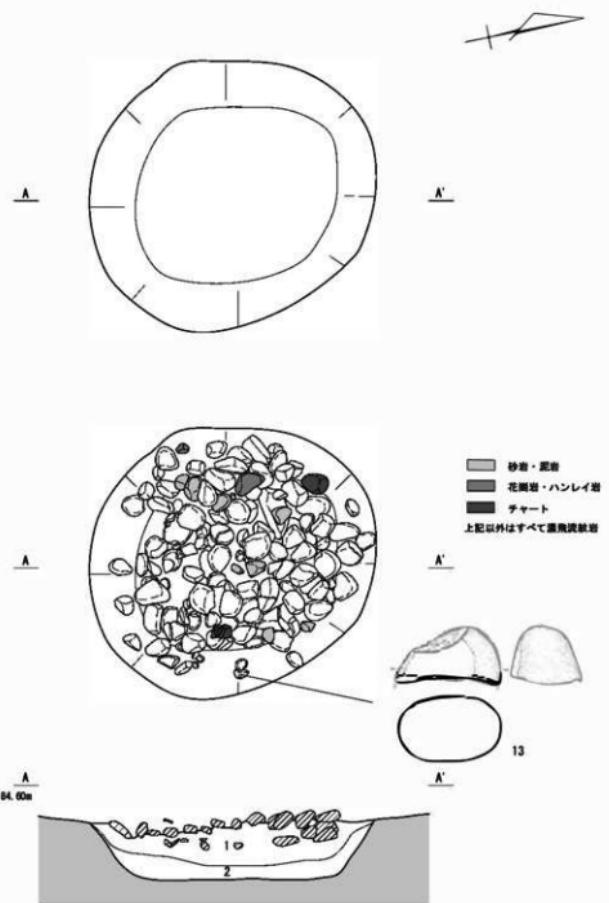


図21 S I 1 出土遺物

表5 S I 1 磯重量別個体数

重量	個数	被熱	割れ	割れ 接合
~99g	61	7	1	32
100g~199g	11	4	1	4
200g~299g	26	20	3	2
300g~399g	14	10	7	3
400g~499g	22	20	6	1
500g~599g	13	12	1	0
600g~699g	7	7	2	0
700g~799g	10	10	4	0
800g~899g	7	7	4	0
900g~999g	4	4	1	0
1000g~1099g	9	9	6	0
1100g~1199g	7	7	4	0
1200g~1299g	3	3	1	0
1300g~1399g	1	1	1	0
1400g~1499g	2	2	1	0
1500g~1599g	2	2	1	0
1600g~1699g	1	1	0	0
1700g~1799g	0	0	0	0
1800g~1899g	0	0	0	0
1900g~1999g	0	0	0	0
2000g~2099g	1	1	0	0
計	201	127	44	42

S I 1



1 10YR2/1 黒色土(暗色)しまる 粘性わずかにあり 径12cm~6cmまでの円錐上部中心に40%含む
2 10YR2/6 明黄褐色砂質土 ややしまる 粘性なし黒色土のブロック5%含む 錫含まず

図22 S I 1造構図

3 土坑

今回の調査において、出土遺物と遺構の切り合い関係から SK1～SK9 を縄文時代の遺構と考えた。SK1は弥生時代のSK15～17に切られ、SK2・SK3は縄文時代のSB1をSK4はSB2を切っており、SK7・SK8は弥生時代のSK12の下から検出されている。

SK1（遺構図：図23）

本遺構は、調査区北部、AB5グリッド内、標高82.95mのやや北側に下る位置にある。

SK17、SK16及びSK15の完掘後の底面や側面において、黒色土の堆積が観察できたため、その外周にラインを引きプランを設定した。

平面形は長楕円形状である。フ拉斯コ状の断面となる。土層を7層に分ける。2層の堆積が厚く粗砂が混入した。また、底部上に堆積した7層は砂質土であり径5mmほどの礫を含んだ。他の底部には見られない堆積状況であった。底面はやや丸い、南側が袋状の側面となる。遺物の出土はなかった。

フ拉斯コ状の遺構になることから、貯蔵穴の可能性が考えられる。底部が砂質土であり水が溜まるような土質ではないが、底部に細かな礫が敷かれているような状況である。このようなことから、人為的な掘り込みであると考える。

この遺構に伴うものではないが、この土坑より西側において、石匙(94)が出土した。また、この遺構を切っているSK15、SK17から、弥生時代中期の土器片が出土していることから、それ以前の可能性が高い。遺構の形状等からこの遺構の時期を縄文時代と推定する。

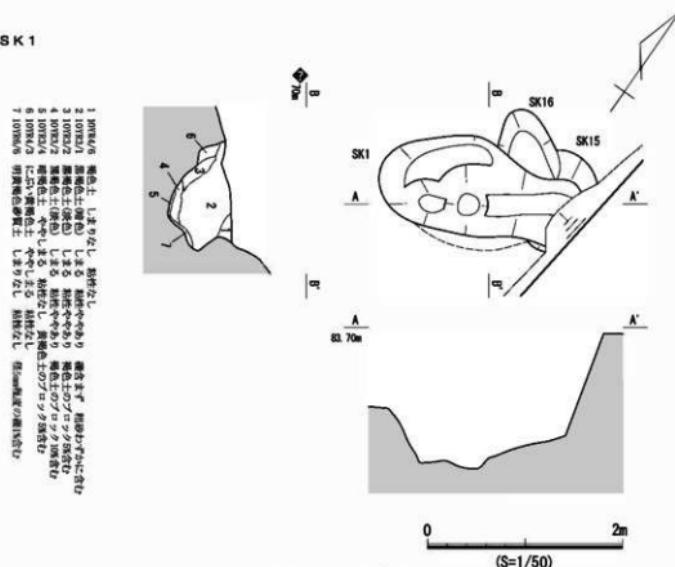


図23 SK1遺構図

S K 2 (遺構図: 図24、遺物図: 図25)

調査区中央部、包含層掘削において、この遺構の範囲となるAK3グリッド及びAK4グリッドからは土器が多く出土した。検出はⅢ層がほぼ0.06m堆積しており、その土を除去して、Ⅳ層上面で茶色が混じる明色な黒色土の広がりを確認した。プランは明瞭であった。標高84.65~84.60内のほぼ平坦地に位置し、掘形は長楕円形状を呈している。本遺構の外周においてSB1の竪穴住居跡のプランを設定したが、土色の観察からこの土坑が新しいと判断して調査を開始した。

平面形状は東西方向に長軸をもつ長楕円形状であり、表面上においては土器が埋土に混入していることを確認した。堆積土層を3層に分ける。埋土中、土器片が散在していた。まとまりではなく、同一個体になりそうな状況でもなかった。底面はやや丸みをおびている。壁は東側及び西側において段差をもつ。

遺物は今回の調査においては、土坑の中で一番多く出土し、縄文土器58点、弥生土器1点、石器12点である。この内の縄文土器11点、石器6点を掲載した。出土縄文土器は、早期が4点、中期と判断できるものは30点ある。石器は打製石斧3点、石錐1点、磨石1点、フレイク7点出土している。出土した土器から、縄文時代中期後葉の土坑と思われる。性格については不明であるが、土器のまとまりがなく、散在して出土したことなどから廃棄土坑の可能性があると思われる。この土坑の位置的な判断だけであるが、この土坑により、住居の炉跡などが破壊された可能性もある。この土坑また周辺から炉石などは出土していない。

S K 3 (遺構図: 図27、遺物図: 図30)

調査区中央部、IV層上面で検出した。SK2同様SB1を切っている。平面形状は東西方向に長軸をもつ長楕円形状であり、底面はやや丸みをおびている。出土遺物は縄文土器が4点で、その内的一点を掲載した。本遺構の所属時期は、出土土器から縄文時代と推定される。

S K 4 (遺構図: 図26、遺物図: 図30)

調査区中央部、IV層上面で検出した。SB2を切っている。平面形状は南北方向に長軸をもつ長楕円形状で、調査区外東に続く。底面はやや丸みをおびている。出土遺物は縄文土器が10点、弥生土器が1点、土師器が1点、石器が1点で、その内の縄文土器4点を掲載した。本遺構の所属時期は、出土土器から縄文時代中期後葉と推定される。

S K 5 (遺構図: 図27、遺物図: 図30)

調査区南、IV層上面で検出した。弥生時代の遺構SK14や搅乱に切られる。平面形状は方形で深さが0.2m、竪穴住居跡になる可能性もあるが、搅乱が激しく全容が明らかでないため土坑とした。出土遺物は縄文土器3点、土師器3点、近世陶磁器1点で、その内の縄文土器2点を掲載した。本遺構の所属時期は、出土土器から縄文時代と推定される。

S K 6 (遺構図: 図28、遺物図: 図30)

調査区中央部よりやや北で、IV層上面で検出した。平面形状は円形状を呈している。底面はやや丸みをおびている。出土遺物は石器2点で、その内の1点を掲載した。38は下呂石の尖頭器で縄文時代のものと考える。本遺構の所属時期は、出土遺物から縄文時代と推定される。

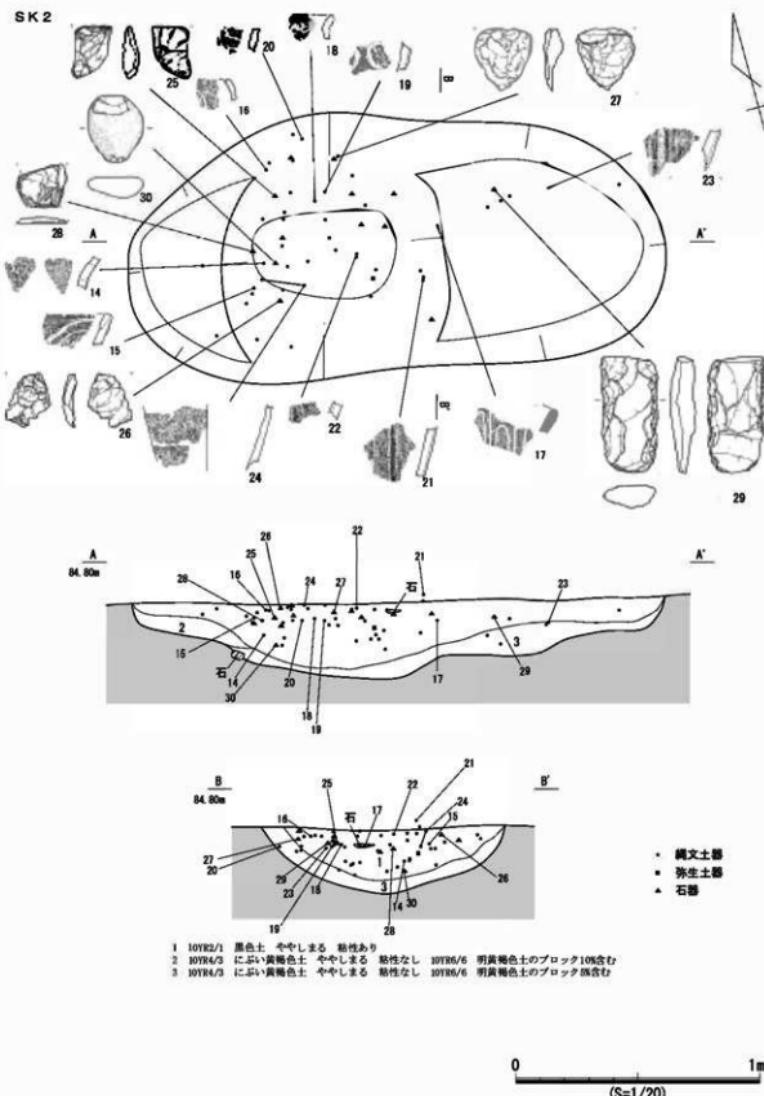


図24 SK 2遺構図

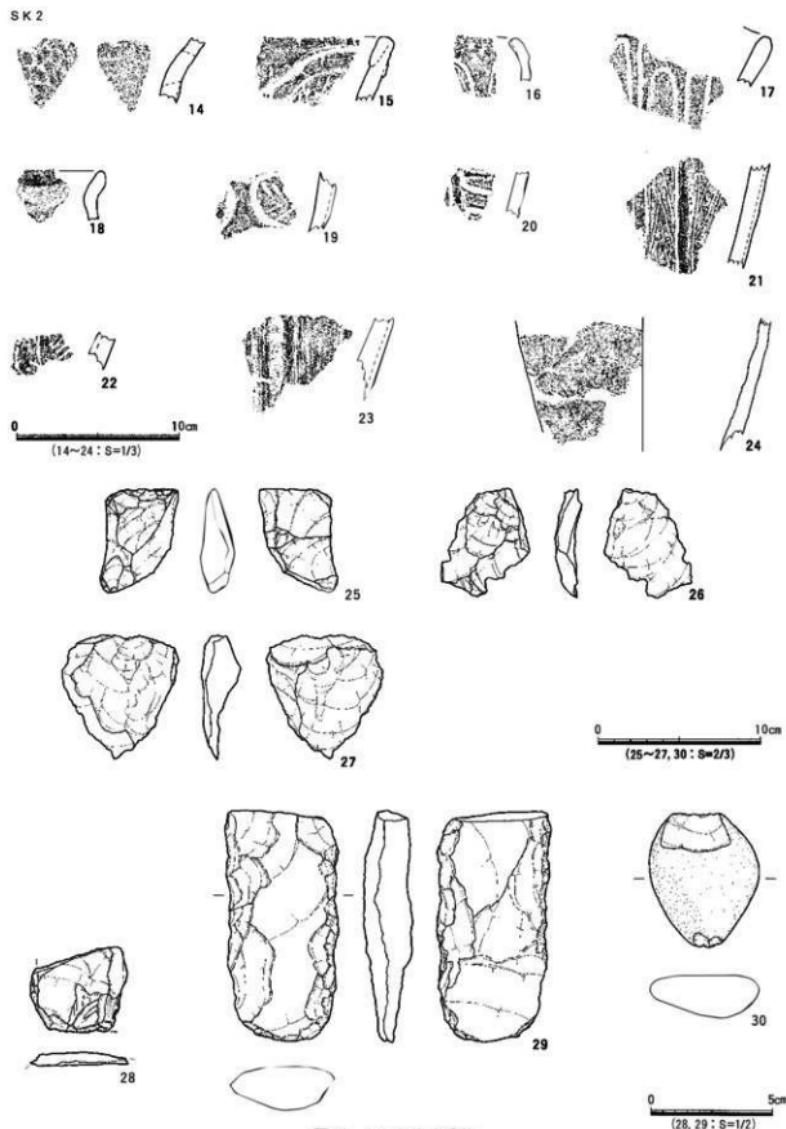


図25 SK 2 出土遺物

SK 7 (遺構図: 図28、遺物図: 図30)

調査区南、IV層上面で検出した。SK 12の下から検出された。平面形は梢円形状を呈している。底面には段丘を形成したときの大小の円礫が検出された。調査区外の東に続いている。出土遺物は土師器2点と石器1点で、その内の石器1点を掲載した。土師器が出土しているが、時期が分からぬほどの細片である。本遺構の所属時期は、出土遺物から縄文時代と推定される。

SK 8 (遺構図: 図29)

調査区南、IV層上面で検出した。SK 12の下から検出された。平面形は梢円形状を呈している。底面には段丘を形成したときの大小の円礫が検出された。調査区外の東に続いている。出土遺物は縄文土器3点、土師器1点で、縄文土器は中期のものは1点と考えられる。土師器が出土しているが、時期が分からぬほどの細片である。本遺構の所属時期は、出土土器から縄文時代と推定される。

SK 9 (遺構図: 図28)

調査区中央部、IV層上面で検出した。SI 1の南で竪穴住居跡群の北、遺構が少ないところにある。平面形状は円形状であり、底面はやや丸みをおびている。出土遺物は縄文土器1点で、縄文時代中期と考えられる。本遺構の所属時期は、出土土器から縄文時代と推定される。

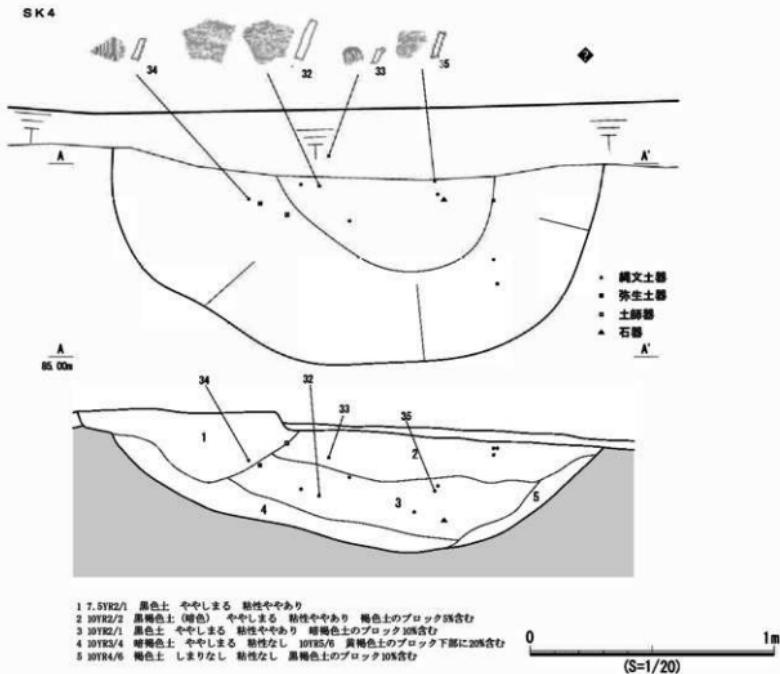
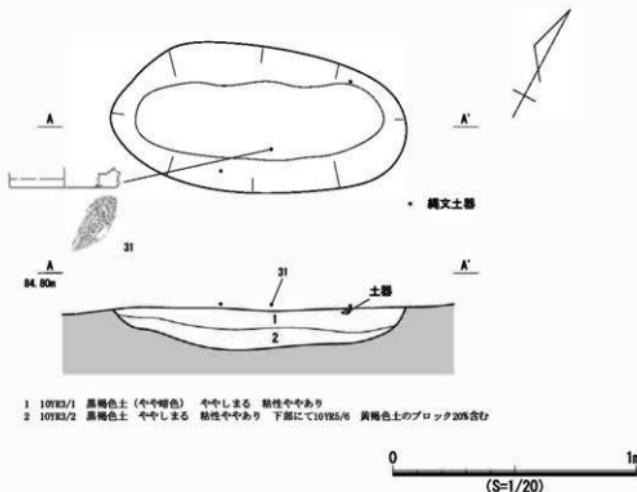


図26 SK 4 遺構図

SK 3



SK 5

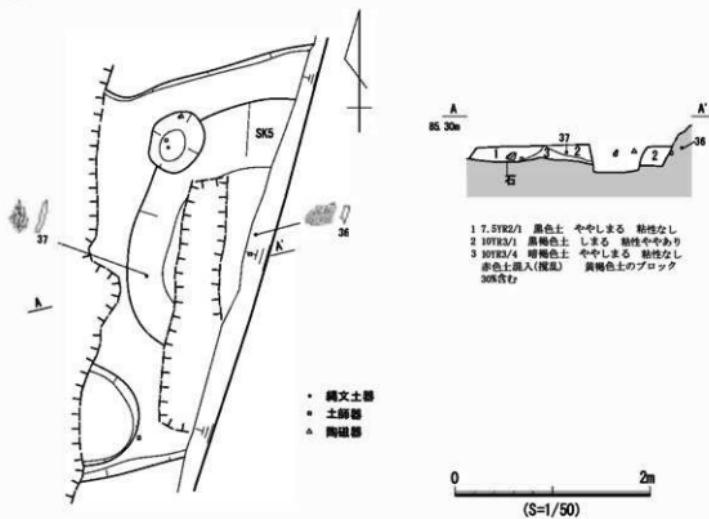


図27 SK 3・SK 5造構図

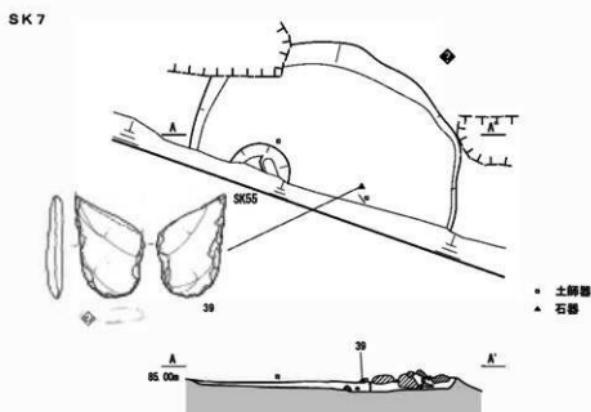
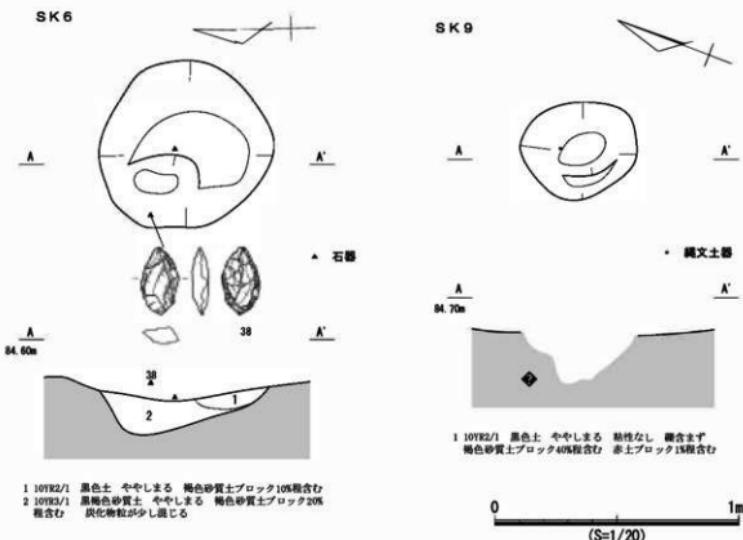


図28 SK 6・SK 7・SK 9 遺構図

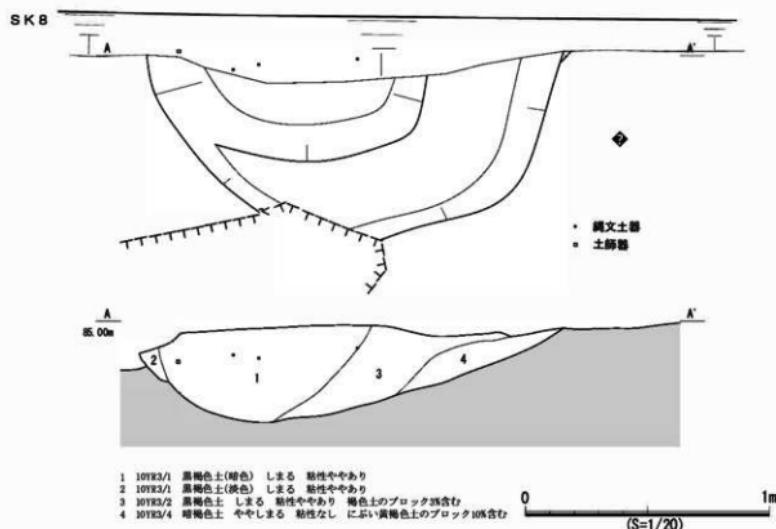


図29 SK 8遺構図

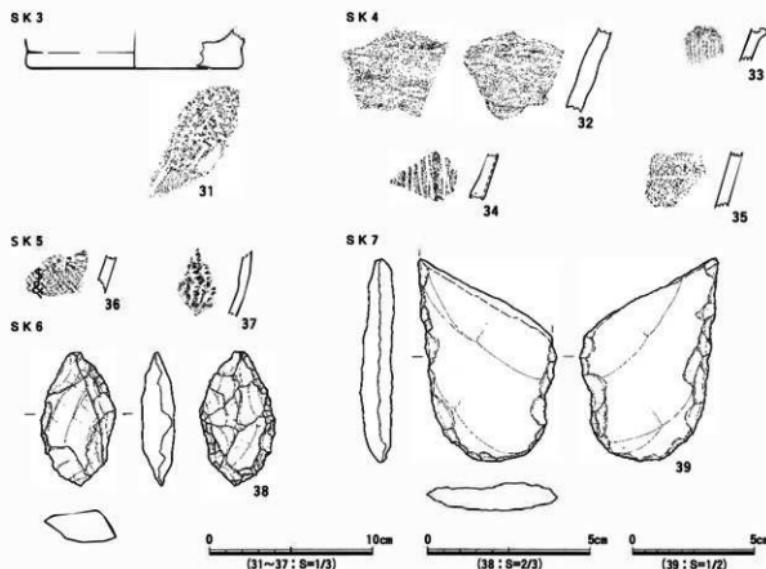


図30 SK 3~7出土遺物

第5節 弥生時代以降の遺構と遺物

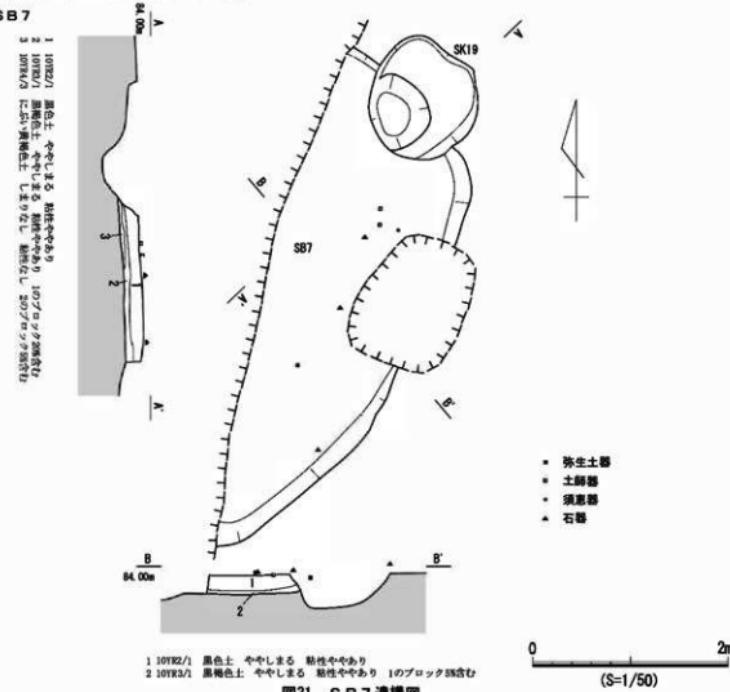
1 堅穴住居跡

今回の調査において、調査区北から出土した弥生土器は中期貝田町式のものが多い。弥生土器の出土位置は縄文土器・石器の出土位置に似ているが、出土量は縄文土器・石器に比べるとかなり少ない。また、弥生時代の遺構は縄文時代の遺構に比べると少なく堅穴住居跡と考えられるものも1軒である。他に土坑が8基あるが、弥生時代の遺構は調査区の北と南に偏っている。

S B 7 (遺構図: 図31)

調査区北部、AD 5・AE 5グリッド内、標高 84.16m のやや西側に傾斜する位置にある。IV層上で検出した。平面形は西側が調査区外になるため不明だが、方形状になると考えた。埋土は単層、底面はやや凸凹するが平坦である。壁は外傾する。S B 6を切っており、SK19に切られている。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物は弥生時代中期の甕1点、土師器2点、須恵器1点、石器3点で2点は打製石斧である。土師器・須恵器は時期が分からぬほどの細片である。出土遺物と遺構の切り合い関係から本遺構の所属時期は弥生時代と推定される。



2 土坑

今回の調査において、出土遺物と遺構の切り合い関係から SK10～19 を弥生時代の遺構と考えた。すべてIV層上面で検出した。SK12はSK7・8の上から検出され、SK14はSK5を切り、SK15～17はSK1を切り、SK19はSB7を切っている。出土遺物は主に弥生時代中期の貝田町式の土器である。

SK10・11（遺構図：図32、遺物図：図36）

これらの遺構は、調査区中央で検出した。SK10は搅乱に切られている。SK10からの出土遺物は弥生土器2点で、2点とも掲載した。SK11からの出土遺物は縄文土器2点、弥生土器3点、土師器4点で、弥生土器2点、土師器1点を掲載した。弥生土器3点は弥生時代中期貝田町式の土器と考えられる。土師器は時期が分からぬほどの細片である。これらの遺構の所属時期は、出土土器から、弥生時代中期と推定される。

SK12・13・14（遺構図：図32・33・34、遺物図：図36）

これらの遺構は、調査区南で検出した。SK12・13は搅乱に切られている。SK12からの出土遺物は縄文土器7点、弥生土器5点、土師器4点、石器1点で、弥生土器3点を掲載した。SK13からの出土遺物は縄文土器1点、弥生土器2点、土師器1点、須恵器1点、石器1点である。壺が1点出土している。SK14からの出土遺物は弥生土器3点、土師器2点で、弥生土器2点を掲載した。弥生時代中期貝田町式の土器と考えられる。土師器は時期が分からぬほどの細片である。これらの遺構の所属時期は、出土土器から、弥生時代中期と推定される。

SK15・16・17・18・19（遺構図：図32～35、遺物図：図36）

これらの遺構は、調査区北で検出した。SK15はSK1を切り、SK16はSK15に切れ、SK1を切っている。SK17はSK1を切り、SK19はSB7を切っている。SK15からの出土遺物は弥生土器1点でこれを掲載した。弥生時代中期貝田町式の壺と考えられる。1973年の狭間地区からも同格子目文様のある壺が出土している。SK16からの出土遺物は土師器1、石器1点で、石器1点を掲載した。掲載した石器は弥生時代の直線刃石器と考えた。野笛遺跡と尾崎遺跡でも出土している。SK17からの出土遺物は縄文土器1点、弥生土器2点、土師器1点である。弥生時代中期貝田町式の壺が2点ある。SK18からの出土遺物は弥生土器1点である。弥生時代中期貝田町式の壺と考えられる。SK19からの出土遺物は縄文土器1点、弥生土器1点、土師器5点である。弥生土器は弥生時代中期貝田町式の壺と考えられる。土師器は時期が分からぬほどの細片である。これらの遺構の所属時期は、出土土器から、弥生時代中期と推定される。

SK20（遺構図：図35、遺物図：図36）

本遺構は、調査区中央で検出した。SD5を切っている。平面形は円形状で、柱痕がある可能性が高い。出土遺物は須恵器2点、石器2点である。石器1点、黒曜石のUFを掲載した。本遺構の所属時期は、出土土器から、古代（7～8世紀）と推定される。

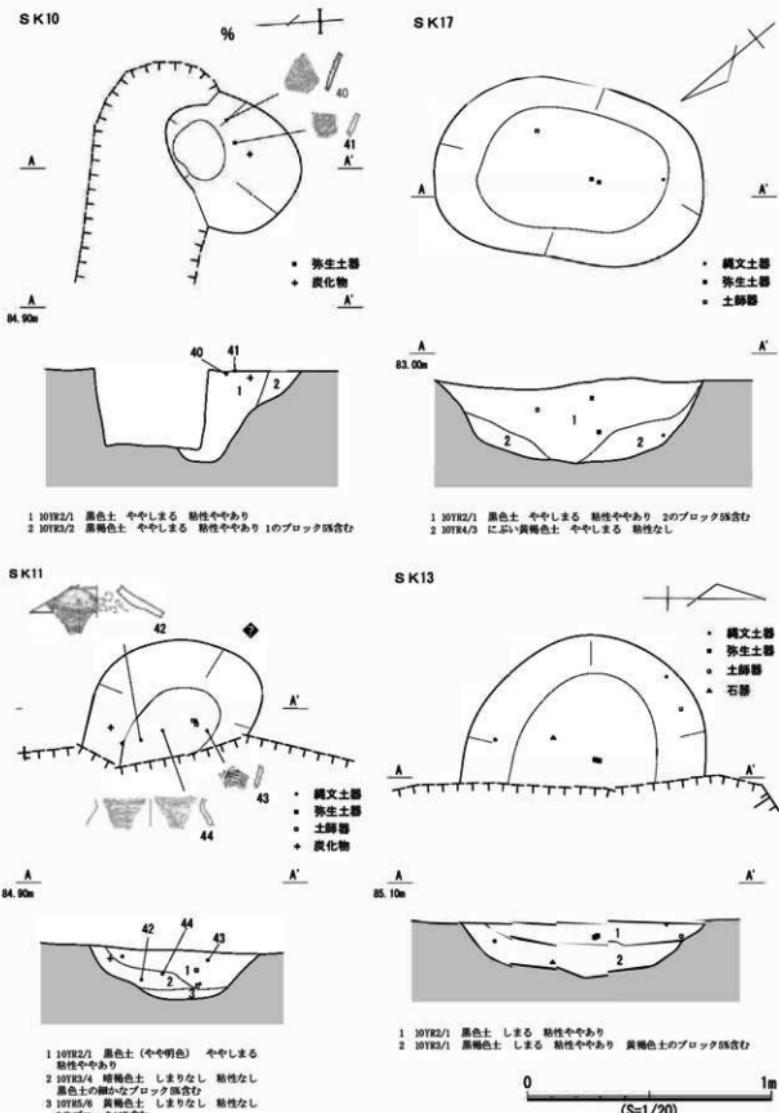
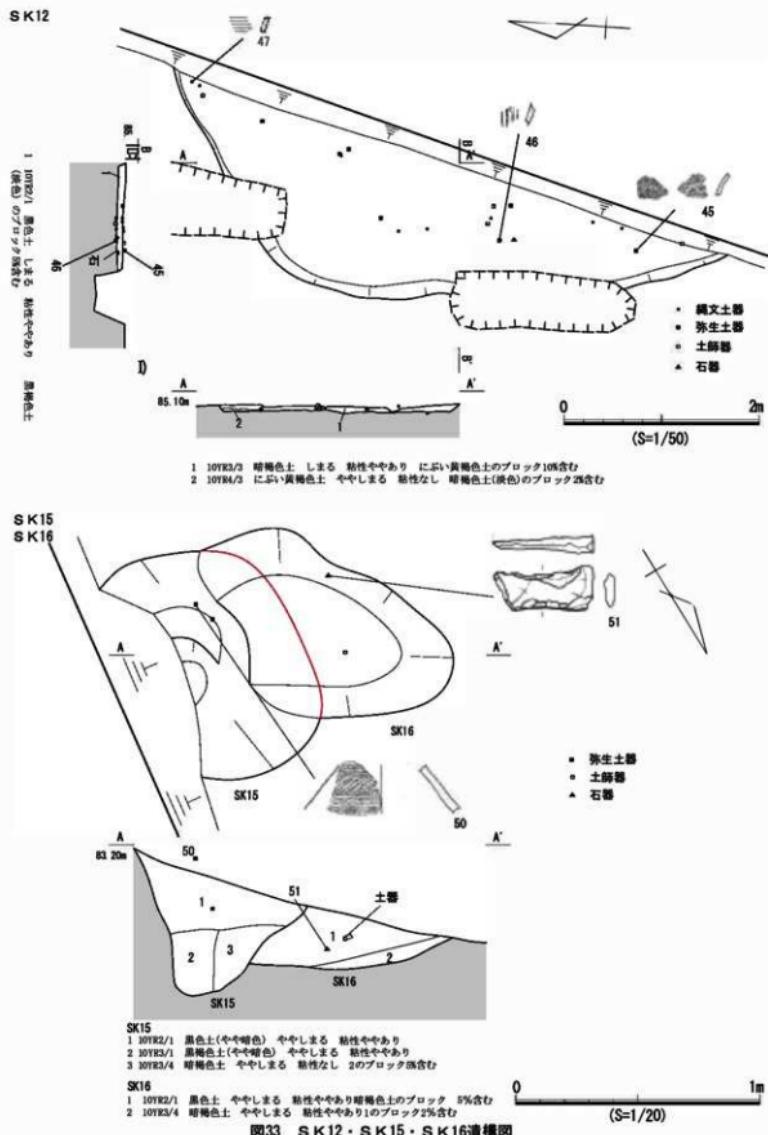
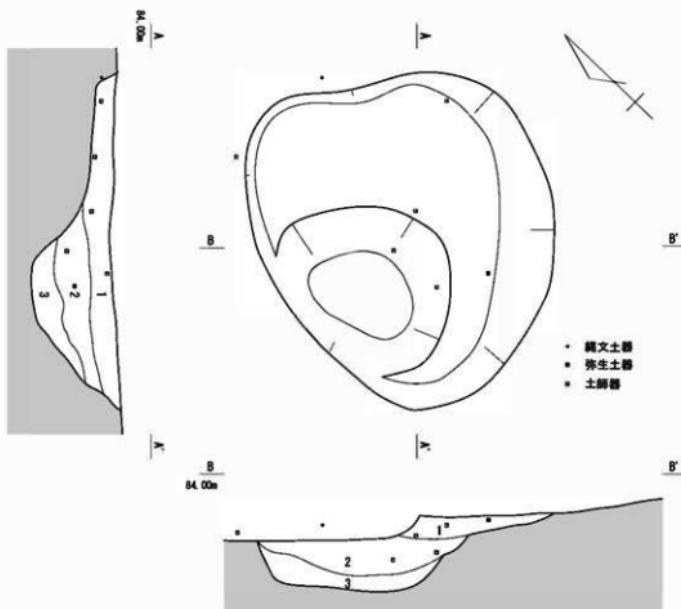


図32 SK10・SK11・SK17遺構図



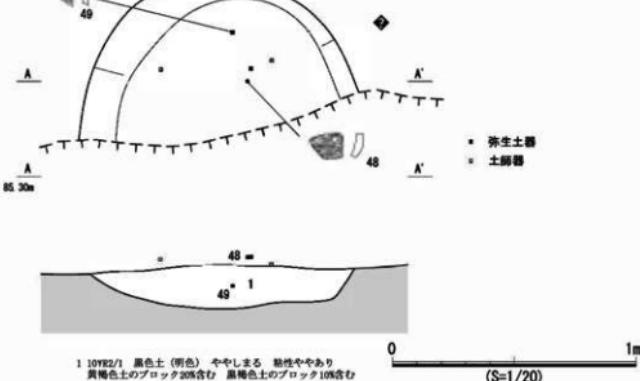
SK19

- 1 7.51R2/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり
 2 7.51R2/2 黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり
 3 10YR6/6 明黄色砂質土 しまりなし 粘性なし ブロック30%含む



- 1 7.51R2/1 黒色土 しまりなし 粘性ややあり
 2 7.51R2/2 黄褐色土 しまりなし 粘性ややあり
 3 10YR6/6 明黄色砂質土 しまりなし 粘性なし 2のブロック30%含む

SK14



- 1 10YR2/1 黒色土(明色) ややしまる 粘性ややあり
 黄褐色土のブロック20%含む 黄褐色土のブロック10%含む

図34 SK14・SK19遺構図

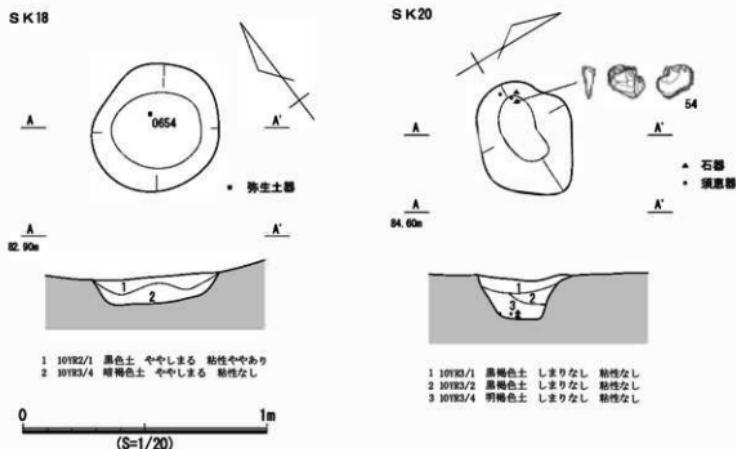


図35 SK18・SK20構造図

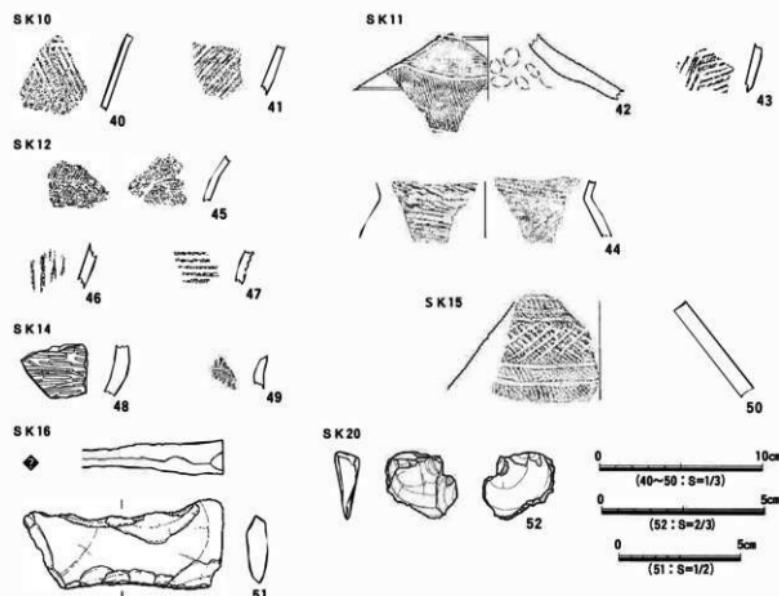


図36 SK11~12, SK14~16, SK20出土遺物

第6節 包含層出土の遺物

1 包含層出土遺物

包含層から出土した遺物は縄文土器、縄文時代の石器、弥生土器、弥生時代の石器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、近世陶磁器、金属製品がある。

包含層から出土した縄文土器は120点で、草期(53)、中期(54~71)、晚期(72)を掲載した。

包含層から出土した弥生土器は31点で、中期中葉貝田町式の壺(73~76)、鉢(77・78)、甕(79~86)を掲載した。

包含層から出土した縄文時代の石器は175点で、R F(89)、尖頭器(90)、石鏃(91~93)、石匙(94)、スクレイパー(95・96)、ビエス・エスキーユ(97・98)、U F(99)、下呂石の石核(100・101)、下呂石のフレイク(102)、打製石斧(103~105)、磨石・敲石(106)を掲載した。89は石材がサヌカイトで表面の風化が激しい。R Fと判断したが、風化しており古いことからナイフ形石器になる可能性もある。90は石材が下呂石で縄文時代中期頃の尖頭器である。大きさがほぼ同じものがSK 6からも出土している。91は有茎鏃、92・93は下呂石の無茎鏃である。95・96はチャートのスクレイパーで、96は節理面が多い石材を使用している。99は黒曜石のU Fである。100・101は下呂石の石核で、100は石鏃の素材を剥離した石核である。103~105はホルンフェルスの打製石斧で、104は基部が、105刃部が折損している。104は刃部が摩耗している。103は刃部が一度折損しているが、刃部を再生して使用している。106は磨面と敲き痕の両方がある。

包含層から出土した土師器は110点で、甕(87・88)を掲載した。88はS字状口縁台付甕で赤塚分類のC類のものである。

包含層から出土した須恵器は60点、灰釉陶器は5点、山茶碗は6点、近世陶磁器14点、金属製品は14点、土製品3点でいずれも細片で時期を特定できるものが無く掲載していない。

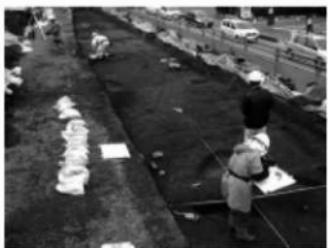


写真5 実測作業風景



写真6 摩削作業風景



図37 包含層出土遺物（1）

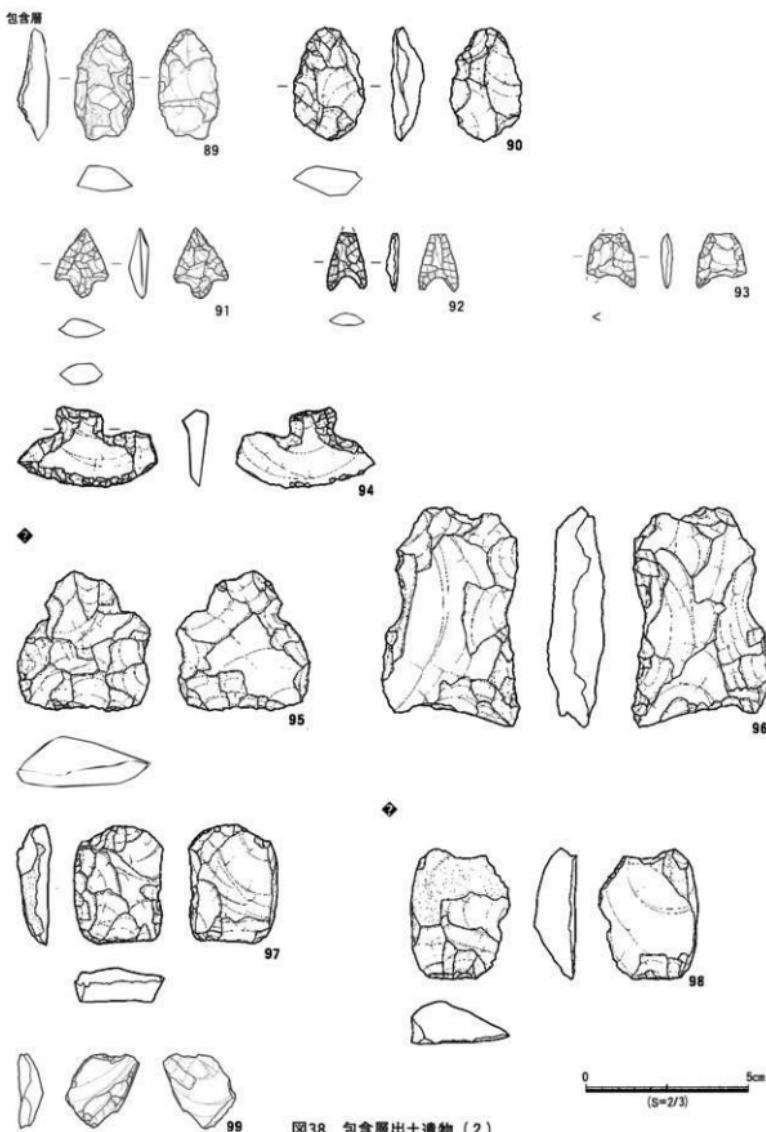


図38 包含層出土遺物（2）

包含層

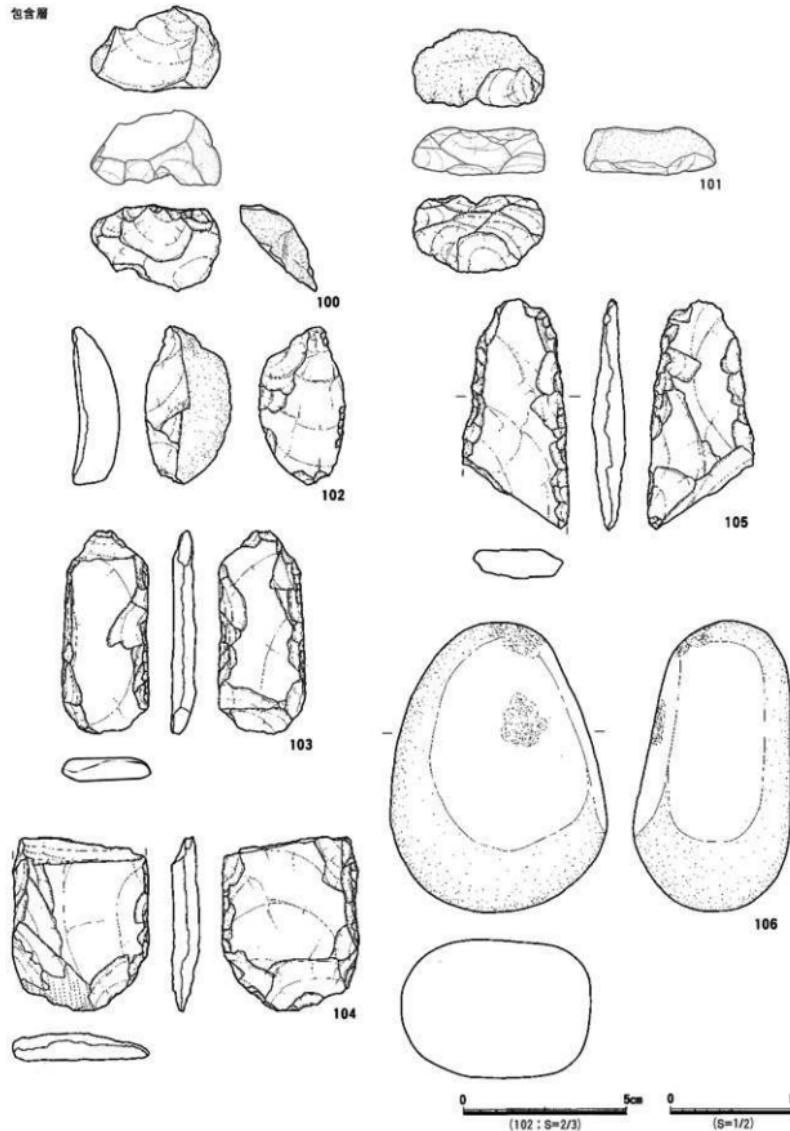


図39 包含層出土遺物（3）

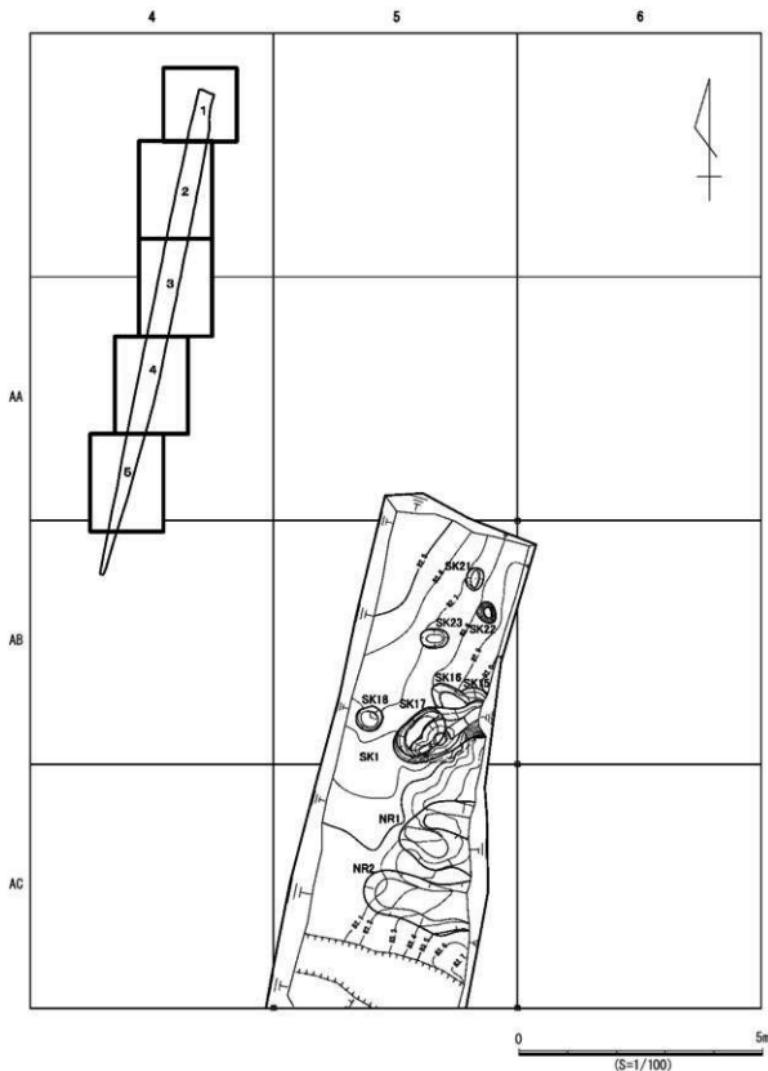
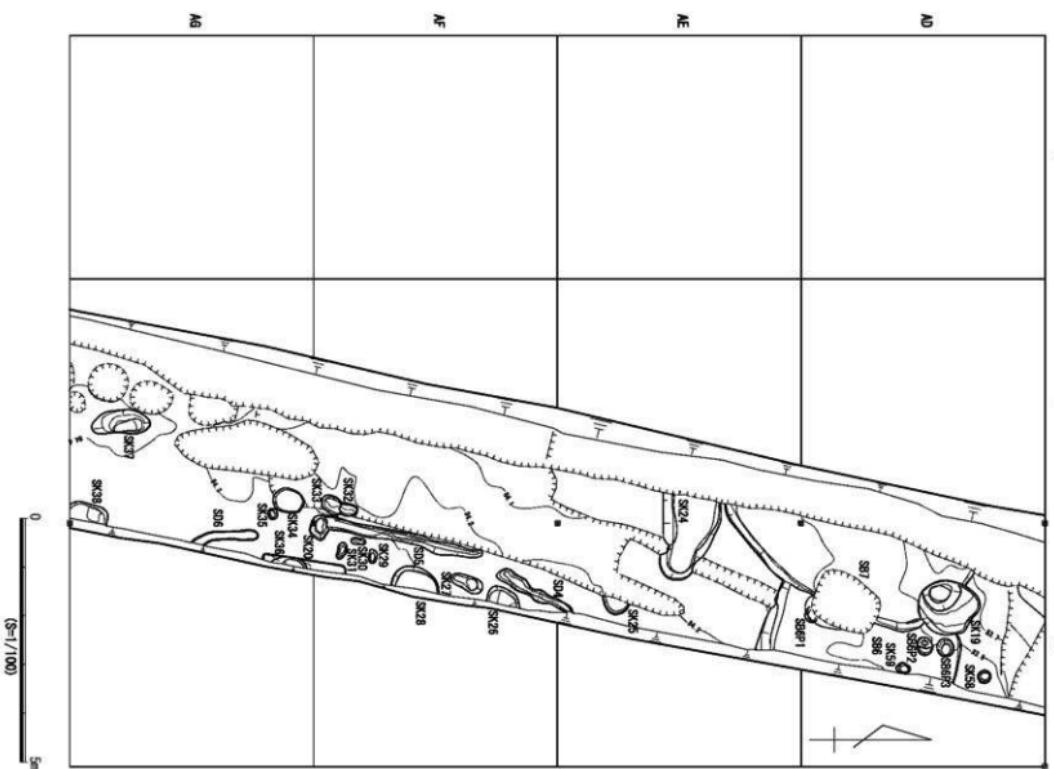


図40 遺構全体図分割図 1

63

図41 造構全体図分割図2



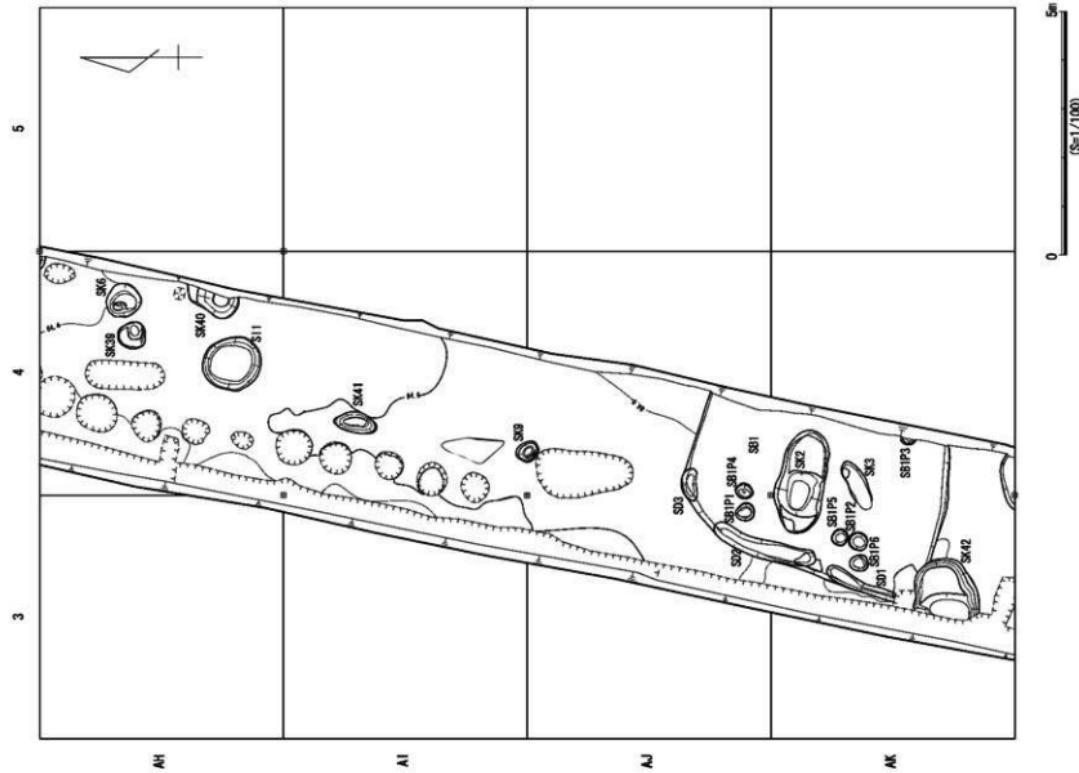


図42 道構全体図分割図 3

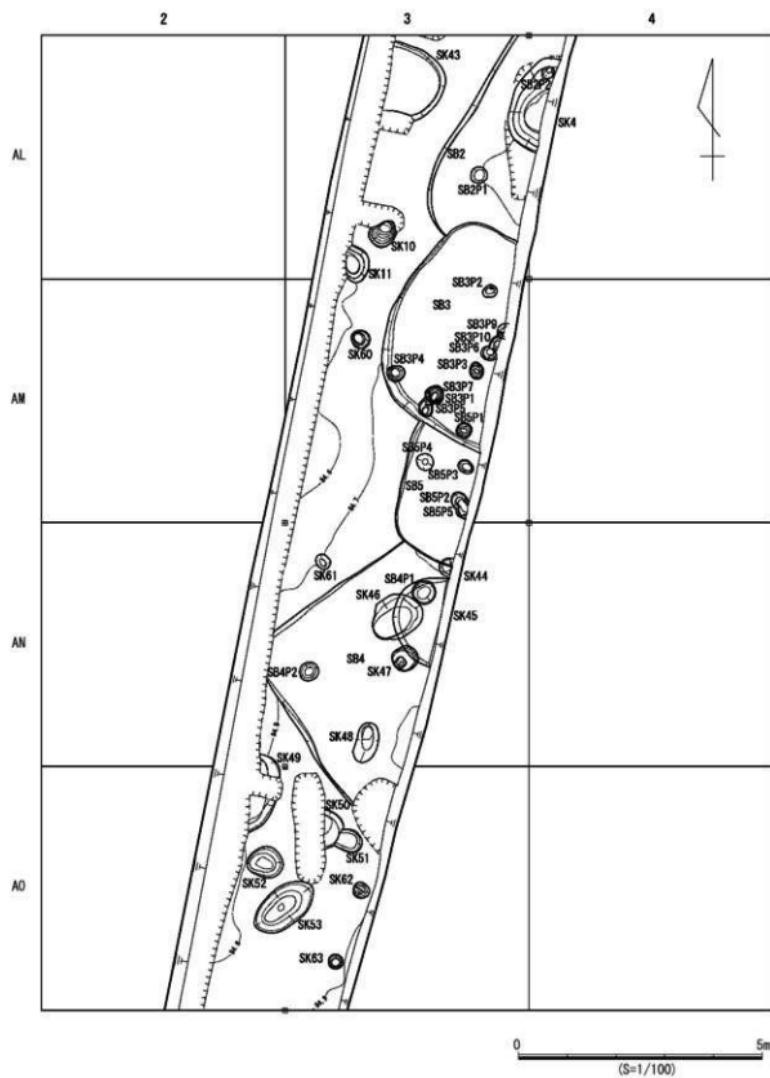


図43 造構全体図分割図 4

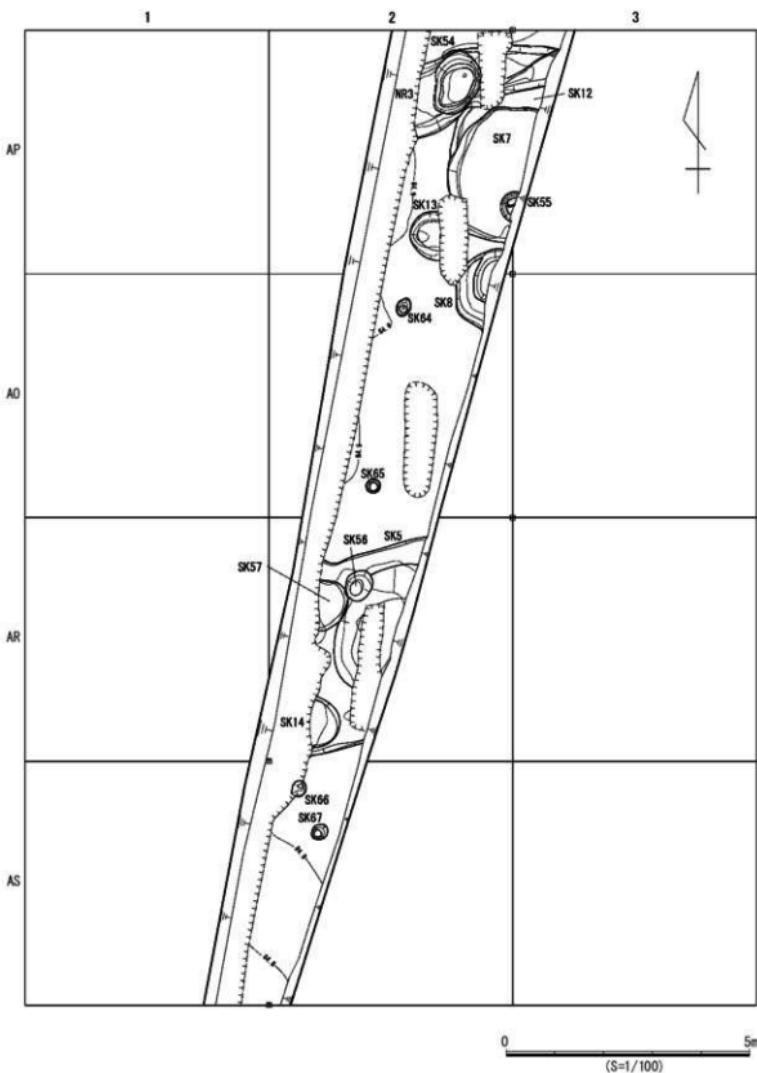


図44 遺構全体図分割図 5

表6 出土遺物一覧表

遺物名	萬文土器 早期	萬文土器 中期	萬文土器 後期	萬文土器 後期不明	新生土器 中期	新生土器 時期不明	土鉢器	須恵器	灰陶 陶器	山茶碗 陶器	中世器 陶磁器	近世器 陶磁器	石製品 石製品	金屬 製品	土製品	合計
SB1	4	5		13			1						3			26
SB2				1									1			2
SB3	2		2				5									9
SB4	3		2				2	1				2				10
SB5	1		1									1				3
SB6												1				1
SB7					1		2	1				3				7
SI1												1				1
SD5													2			2
SK1																0
SK2	4	30		24	1							12				71
SK3		1		3												4
SK4	2	3		5		1	1					1				13
SK5				3			3					1				7
SK6												2				2
SK7							2					1				3
SK8		1		2			1									4
SK9		1														1
SK10					2											2
SK11		2	3		4											9
SK12		7	1	4	4							1				17
SK13		1	1	1	1	1						1				6
SK14			3		2											5
SK15			1													1
SK16						1						1				2
SK17	1				2	1										4
SK18					1											1
SK19			1	1		5										7
SK20							2					2				4
SK28												2				2
SK38						1										1
SK40												2				2
SK42							1					1				2
SK60							1									1
SK62																1
SK63							1									1
SK66	1			1												2
NR1							1									1
NR3							1									1
遺物小計	12	47	0	68	17	6	41	6	0	0	0	1	38	2	0	238
I層	2		1	1			3	2				4	4		2	19
II層		2		2			28	20	2	2		4	53	10	1	124
III層 AR5			1			3	1					3				8
AC5						6	5	2			2	11	1			27
AB5		1	1			10	4					12	1			29
AE4						2	1					1				4
AE5						2	5					8	1			16
AF5			1													1
AG4							1					3				4
AG5												3				3
AH4			2		3	2		1				2	12			22
AJ4	1							1	1				5			8
AJ4	2	7	4		2	2	3	1				8				29
AK3	37		24									3				65
AK4	8		7			1						4				20
AL3	1	1		3		18	2					8	1			34
AL4		1	2									2				5
AM3		2	11	2	7	1						7				30
AN3		1			1	3						3				8
AO2						2										2
AO3						3							3			6
AP3			1		4	2						2				9
AQ2					3	1						1				5
AR2					1											1
瓊乳 AC5					4							6				10
AD5		5	1	1				1				5				13
AF5		1	1	3	3							1	2			11
AG4			1				1					1				3
AJ4		1										4				5
AL3		1			7	3										11
AO3							1									1
AP_R2	1			2	1		1					1	1			7
総合・瓊乳小計	4	59	2	55	29	4	110	60	5	6	0	14	175	14	3	540
合計	16	106	2	123	46	10	151	66	5	6	0	15	213	16	3	778

表7 遺構観察表(1)

遺構名	地区 大 南北 区 東西 北	指 標	切り合ひ関係				規範(m)				備考	
			埋 土	堆 積	断 面	底面	<切られる	>切る	長軸 上端	短軸 上端	長軸 下端	短軸 下端
SB1 A J 3 ○ 2 E A1 B3 a1	SK02 SK03						5.36	(3.12)	5.20	(3.02)	0.12	
SB1P1 A J 3 ○ 1 A B2 B1 a1							0.37	0.36	0.25	0.21	0.13	
SB1P2 A K 3 ○ 1 A A2 A1 a1							0.40	0.36	0.24	0.19	0.12	
SB1P3 A K 4 ○ 1 A C4 F b1							(0.30)	(0.12)	(0.09)	(0.05)	0.14	
SB1P4 A J 4 ○ 1 A A2 B2 a1							0.38	0.31	0.24	0.15	0.13	
SB1P5 A K 3 ○ 1 A B1 A1 a1							0.34	0.32	0.20	0.17	0.08	
SB1P6 A K 3 ○ 2 C B2 A1 a2							0.39	0.33	0.27	0.21	0.13	
SD1 A K 3 ○ 1 A A1 F a1							(1.56)	0.29	(1.10)	0.18	0.07	SB1内周溝
SD2 A J 3 ○ 2 D B1 B4 c1							2.18	0.40	2.04	0.30	0.09	SB1内周溝
SD3 A J 4 ○ 1 A A5 D2 a1							0.65	0.27	0.44	0.14	0.50	SB1内周溝
SB2 A L 3 ○ 2 E B1 F a1	SB3 SK04						5.26	(1.97)	5.12	(1.90)	0.11	
SB2P1 A L 4 ○ 1 A A1 B1 a1	SB3						0.35	0.33	0.23	0.20	0.07	
SB2P2 A L 3 ○ 1 A B1 A1 a2	SK04						0.27	0.23	0.11	0.10	0.07	
SB3 A M 3 ○ 3 B B1 F c1	SB2	SB5P1					4.16	(2.35)	3.84	(2.21)	0.22	
SB3P1 A M 3 ○ 2 C A4 A1 a2	SB3P7						0.41	0.37	0.15	0.09	0.41	
SB3P2 A M 3 ○ 1 A A5 B1 a1							0.28	0.26	0.15	0.11	0.60	
SB3P3 A M 3 ○ 2 G A3 B2 a1							0.45	0.36	0.13	0.08	0.36	
SB3P4 A M 3 ○ 3 G A3 B1 a2							0.35	0.32	0.16	0.15	0.23	
SB3P5 A M 3 ○ 3 G A2 B1 f1	SB3P1						(0.32)	0.29	0.13	0.10	0.17	
SB3P6 A M 3 ○ 1 A A3 A1 a1	SB3P9 SB3P10						(0.36)	(0.34)	(0.15)	(0.13)	0.31	
SB3P7 A M 3 ○ 1 A A1 A1 a1	SB3P1						0.35	0.30	0.27	0.20	0.09	
SB3P8 A M 3 ○ 2 G C4 F a2							0.32	(0.16)	0.19	(0.09)	0.22	
SB3P9 A M 3 ○ 2 B A2 F b1	SB3P6 SB3P8	SB3P10					0.54	(0.43)	(0.33)	(0.27)	0.26	
SB3P10 A M 3 ○ 2 G A3 F a3	SB3P6 SB3P9						(0.32)	(0.21)	(0.13)	(0.07)	0.20	
SB4 A N 3 ○ 1 A B1 B3 a1	SK44 SK45 SK46 SK47 SK48						5.95	(3.28)	5.85	(3.25)	0.10	
SB4P1 A N 3 ○ 1 A A1 A1 a1	SK45						0.48	0.47	0.28	0.22	0.11	
SB4P2 A N 3 ○ 2 G A1 A1 a1							0.40	0.37	0.20	0.20	0.11	
SB5 A M 3 ○ 2 E B1 F a2	SB3 SB4						(0.37)	(1.61)	(2.43)	(1.50)	0.15	
SB5P1 A M 3 ○ 2 C A4 A1 a1	SB3						0.32	0.31	0.13	0.08	0.39	
SB5P2 A M 3 ○ 1 A B6 F a1	SB5P6						(0.37)	0.03	(0.28)	0.13	2.20	
SB5P3 A M 3 ○ 2 C A2 B2 a1							0.32	0.26	0.18	0.13	0.12	
SB5P4 A M 3 ○ 1 A A2 A1 a1							0.36	0.33	0.23	0.11	0.14	
SB5P5 A M 3 ○ 2 G A3 F a2	SB5P2						(0.36)	0.27	(0.21)	0.16	0.28	
SB6 A D 5 ○ 1 A B1 F c1	SK19 SB7						4.10	(1.39)	3.71	(1.39)	0.18	
SB6P1 A D 5 ○ 1 A A3 F a1							0.29	(0.14)	0.19	(0.10)	0.10	
SB6P2 A D 5 ○ 2 C A2 A2 a1	SK19						0.39	0.32	0.15	0.10	0.11	
SB6P3 A D 5 ○ 2 D A2 A1 a1	SK19						0.38	0.35	0.22	0.17	0.23	
SB7 A D 5 ○ 2 B B1 B4 a1	SK19	SK24 SB6					(5.28)	(1.80)	(4.94)	(1.63)	0.18	
SD4 A F 5 ○ 1 A A1 F a1							(1.67)	0.28	(1.58)	0.14	0.06	
SD5 A F 5 ○ 1 A C2 B4 a1	SK20						(3.25)	0.27	(3.16)	0.19	0.13	
SD6 A G 5 ○ 1 A B5 F a1							(1.33)	0.21	(1.28)	0.15	0.05	
SI1 A H 4 ○ 2 C B1 B1 a2							L 17	1.10	0.90	0.78	0.25	
SK01 A B 5 ○ 7 E D2 F a3	SK15 SK16						(1.74)	1.00	0.22	0.21	0.64	
SK02 A K 3 ○ 3 C E1 B4 c3							2.19	1.08	0.58	0.35	0.25	
SK03 A K 3 ○ 2 B B1 B4 c1							L 21	0.66	1.02	0.32	0.17	
SK04 A L 4 ○ 5 D C2 F c1							(2.08)	(0.82)	(0.90)	(0.37)	0.50	
SK05 A R 2 ○ 3 D B1 F c1	SK14 SK57						3.85	(1.18)	2.86	(0.75)	0.20	
SK06 A H 4 ○ 2 D A1 B1 a1							0.71	0.68	1.72	0.08	0.15	
SK07 A P 2 ○ 1 A B1 F b1	SK12						2.79	(1.54)	1.67	(1.24)	0.11	
SK08 A P 2 ○ 4 D A1 F a1	SK12						(1.71)	(0.66)	(0.78)	-	0.17	
SK09 A I 4 ○ 1 A E2 R2 c3							0.48	0.40	0.21	0.08	0.20	
SK10 A L 3 ○ 2 G A3 F a3							0.59	0.51	0.25	0.20	0.38	
SK11 A L 3 ○ 3 D A2 F b1							0.67	(0.47)	0.32	(0.26)	0.20	
SK12 A P 2 ○ 2 E B1 F a2							(5.87)	(1.67)	(5.72)	(1.52)	0.07	
SK13 A P 2 ○ 2 B B2 F c1							1.00	(0.62)	0.60	(0.46)	0.22	
SK14 A R 2 ○ 1 A A1 F b1							(1.17)	(0.64)	(0.94)	(0.50)	0.18	
SK15 A B 5 ○ 3 G A3 F b1	SK01						0.97	(0.53)	(0.18)	(0.07)	0.50	
SK16 A B 5 ○ 2 C B2 E a1	SK15	SK01					0.64	(0.59)	0.40	(0.38)	0.25	
SK17 A B 5 ○ 2 C A2 B3 a1	SK01						L 11	0.71	0.79	0.50	0.32	

表8 造構観察表(2)

造構名	地区		掲載	埋土	地盤	断面	平面	底面	切り合い関係		規模(m)				備考	
	大区	小区							<切られる	>切る	兵輔上端	短輔上端	長輔下端	短輔下端	高さ	
SK18	A	B	5	○	2	B	B1	B1	a1		0.52	0.51	0.36	0.30	0.11	
SK19	A	D	5	○	3	B	B1	B1	b1	SB7	1.37	1.25	0.45	0.32	0.33	
SK20	A	F	5	○	3	D	B2	B1	b1	SD6	0.46	0.39	0.28	0.15	0.16	
SK21	A	B	5		1	A	B1	B2	a1		0.46	0.35	0.40	0.15	0.07	
SK22	A	B	5		3	G	A3	B2	a2		0.44	0.35	0.29	0.14	0.34	
SK23	A	B	5		1	A	A1	B2	a2		0.56	0.40	0.34	0.16	0.09	
SK24	A	E	5		1	A	B1	F	c1		(1.75)	1.30	(1.58)	0.85	0.08	
SK25	A	F	5		1	A	B1	F	a1		(0.58)	(0.33)	(0.48)	(0.26)	0.08	
SK26	A	F	5		1	A	B1	F	a1		(0.70)	(0.35)	(0.58)	(0.29)	0.08	
SK27	A	F	5		1	A	B1	B4	a2		0.68	0.31	0.50	0.22	0.08	
SK28	A	F	5		1	A	B2	F	c1		1.00	(0.46)	0.87	(0.35)	0.17	
SK29	A	F	5		1	A	A2	D2	a1		0.28	0.16	0.16	0.08	0.06	■石抜き取りか
SK30	A	F	5		1	A	B1	B4	b1		0.31	0.14	0.20	0.08	0.02	■石抜き取りか
SK31	A	F	5		1	A	A2	B3	a1		0.34	0.18	0.26	0.08	0.07	■石抜き取りか
SK32	A	F	4		1	A	B1	B3	a1	SK33	0.40	0.26	0.34	0.18	0.04	
SK33	A	F	4		1	A	A1	F	a1	SK32	(0.40)	0.36	(0.34)	0.24	0.06	
SK34	A	G	4		1	A	B1	A2	b1		0.65	0.49	0.55	0.43	0.05	
SK35	A	G	4		1	A	A2	A2	a1		0.23	0.19	0.15	0.09	0.07	
SK36	A	G	5		2	C	A3	F	a3		1.73	(0.18)	0.47	(0.13)	0.19	
SK37	A	G	4		2	C	A2	B4	b1		1.21	0.50	0.62	0.24	0.25	
SK38	A	G	4		2	B	A1	F	c1		0.88	(0.38)	0.77	(0.33)	0.09	
SK39	A	H	4		1	A	B1	B1	c1		0.57	0.55	0.21	0.17	0.07	
SK40	A	H	4		4	C	A3	F	b1		1.12	(0.46)	0.31	(0.23)	0.33	
SK41	A	I	4		1	A	A2	B4	a1		0.88	0.42	0.50	0.15	0.27	
SK42	A	K	3		4	D	A2	F	c3	SBI	1.32	(1.21)	0.80	(0.39)	0.44	
SK43	A	L	3		1	A	B1	F	a1		(1.68)	(1.23)	(1.46)	(1.09)	0.11	
SK44	A	N	3		1	A	B2	F	a1	SB4	(0.40)	(0.24)	(0.31)	(0.17)	0.09	
SK45	A	N	3		1	A	B1	F	a1	SB4	(1.83)	(0.96)	(1.72)	(0.86)	0.09	
SK46	A	N	3		1	A	B1	B2	a3	SB4	1.16	0.87	0.82	0.51	0.17	
SK47	A	N	3		2	G	C2	F	a3	SB4	0.81	0.75	0.11	0.05	0.30	
SK48	A	N	3		1	A	A2	B3	a1	SB4	0.97	0.56	0.47	0.22	0.21	
SK49	A	O	2		3	C	B2	F	c1		(1.62)	(0.46)	(1.33)	(0.26)	0.27	
SK50	A	O	3		1	A	A2	F	a1	SK51	(0.87)	(0.38)	(0.65)	(0.28)	0.12	
SK51	A	O	3		1	A	A1	F	a1	SK50	(0.51)	0.45	(0.40)	0.30	0.09	
SK52	A	O	2		2	C	A1	B1	a1		0.67	0.66	0.44	0.43	0.19	
SK53	A	O	2		2	C	A2	A3	a2		1.42	0.77	0.75	0.29	0.24	
SK54	A	P	2		4	C	B2	B2	c3	NB3	1.28	(0.93)	0.90	0.60	0.38	
SK55	A	P	2		2	D	A4	F	b1	SK07 SK12	0.63	(0.27)	(0.16)	0.10	0.32	
SK56	A	R	2		2	G	B1	B1	a1	SK05	0.64	0.53	0.34	0.25	0.14	
SK57	A	R	2		1	A	B1	F	a1		1.08	(0.61)	0.98	(0.52)	0.11	
SK58	A	D	5		1	A	B2	B1	a1		0.28	0.27	0.19	0.16	0.18	
SK59	A	D	5		1	A	A3	A2	a2		0.33	0.24	0.16	0.14	0.20	
SK60	A	M	3		1	A	B2	A1	a2		0.39	0.36	0.21	0.16	0.21	
SK61	A	N	3		1	A	A2	A2	a1		0.32	0.26	0.18	0.16	0.11	
SK62	A	O	3		2	C	A2	B1	b1		0.34	0.31	0.13	0.05	0.16	
SK63	A	O	3		1	A	A3	A1	c1		0.30	0.29	0.16	0.15	0.25	
SK64	A	Q	2		1	A	A3	B2	a2		0.39	0.28	0.14	0.13	0.22	
SK65	A	Q	2		1	A	A4	A1	a1		0.19	0.18	0.15	0.15	0.21	
SK66	A	S	2		2	D	A2	B2	a2		0.35	0.28	0.10	0.07	0.18	
SK67	A	S	2		2	G	A3	B1	a2		0.35	0.30	0.15	0.14	0.25	
NR1	A	C	5		4	C	A1	F	c1		(1.43)	1.41	0.97	0.45	0.26	
NR2	A	C	5		3	A	A1	F	a1		(2.17)	1.05	(1.92)		0.20	
NR3	A	P	2		3	C	A1	F	c1	SK12	(1.53)	1.29	(1.28)	1.06	0.27	

表9 土器観察表(1)

掲載番号	種別	器種	出土位置	地区名	層位	分類・時期等	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考	排収番号	図版番号
1	縄文土器	深鉢	SB1	a	早期	-	-	-	-	押型文、織維痕	9	5
2	縄文土器	深鉢	SB1	a	中期	-	-	-	-	縦方向の沈線区画	9	5
3	縄文土器	深鉢	SB1	b	中期	-	-	-	-	破方向の沈線区画、区画内矢羽根状沈線	9	5
4	縄文土器	深鉢	SB1SD1	1	中期	-	-	-	-	沈線区画、区画内に矢羽根状沈線	9	5
5	縄文土器	深鉢	SB1SD1	1	中期	-	-	-	-	縦方向の沈線区画	9	5
6	縄文土器	深鉢	SB3	2	中期	-	-	-	-	縦方向の沈線区画、縄文有りか	15	5
7	縄文土器	深鉢	SB3P5	d	中期	-	-	-	-	隆帯区画、区画内に沈線	15	5
8	縄文土器	深鉢	SB4	a	中期	-	-	-	-	隆帯、刺突、沈線	16	5
9	縄文土器	深鉢	SB4	a	中期	-	-	-	-	隆帯区画、区画内に沈線	16	5
10	縄文土器	深鉢	SB4	a	中期	-	-	-	-	縦方向の沈線	16	5
11	縄文土器	深鉢	SB5	a	中期	-	-	-	-	縄文、沈線	18	5
14	縄文土器	深鉢	SK02	C	早期	-	-	-	-	格内形押型文、隆帯貼付、裏面条痕	25	5
15	縄文土器	深鉢	SK02	b	中期	-	-	-	-	隆帯貼付、口縁部肥厚	25	5
16	縄文土器	深鉢	SK02	1	中期	-	-	-	-	沈線、波状口縁	25	5
17	縄文土器	深鉢	SK02	1	中期	-	-	-	-	沈線区画、波状口縁	25	5
18	縄文土器	深鉢	SK02	1	中期	-	-	-	-	隆帯、口縁部肥厚、波状口縁	25	5
19	縄文土器	深鉢	SK02	1	中期	-	-	-	-	隆帯、沈線区画、区画内に矢羽根状沈線	25	5
20	縄文土器	深鉢	SK02	1	中期	-	-	-	-	隆帯区画、区画内に沈線	25	5
21	縄文土器	深鉢	SK02	a	中期	-	-	-	-	縦方向の隆帯区画、区画内矢羽根状沈線	25	5
22	縄文土器	深鉢	SK02	a	中期	(12.8)	-	-	-	縦方向の隆帯区画、区画内に矢羽根状沈線、外縁スス付着	25	5
23	縄文土器	深鉢	SK02	b	中期	-	-	-	-	隆帯区画、内縁にスス付着	25	5
24	縄文土器	深鉢	SK02	a	不明	-	-	-	-	内外面指ナデ	25	5
31	縄文土器	深鉢	SK03	a	中期	-	-	-	-	底部網代正痕	30	6
32	縄文土器	深鉢	SK04	f	早期	-	-	-	-	織維痕、裏面に条痕	30	6
33	縄文土器	深鉢	SK04	d	中期	-	-	-	-	隆帯区画、区画内に沈線	30	6
34	縄文土器	深鉢	SK04	c	中期	-	-	-	-	縦方向の隆帯区画、沈線	30	6
35	縄文土器	深鉢	SK04	d	中期	-	-	-	-	縄文	30	6
36	縄文土器	深鉢	SK05	1	不明	-	-	-	-	抛系文か	30	6
37	縄文土器	深鉢	SK05	1	不明	-	-	-	-	押引か	30	6
40	弥生土器	壺	SK10	1	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	-	条痕、沈線	36	6
41	弥生土器	壺	SK10	1	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	-	条痕	36	6
42	弥生土器	壺	SK11	b	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	-	付加沈線、ハケ目後ミガキ	36	6
43	弥生土器	壺	SK11	a	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	-	条痕	36	6
44	土器飾	壺	SK11	b	古墳	-	-	-	-	内外面ハケ目	36	6
45	弥生土器	壺	SK12	a	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	-	外縁ハケ目と刺突、内面ハケ目、頬部	36	6
46	弥生土器	壺	SK12	b	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	-	条痕	36	6
47	弥生土器	壺	SK12	a	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	-	条痕、外縁にスス付着	36	6
48	弥生土器	壺	SK14	1	中期	-	-	-	-	ミガキ	36	6
49	弥生土器	壺	SK14	1	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	-	ハケ目後刺突、付加沈線	36	6
50	弥生土器	壺	SK15	1	中期(古井式)	-	-	-	-	ハケ目後付加沈線、区画内にミガキ、三河原、1973年検問地区でも出土	36	6
53	縄文土器	深鉢	包含層 AL3	III	早期(高山寺式)	-	-	-	-	押型文	37	7
54	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	沈線区画、区画内に矢羽根状沈線、口縁部肥厚	37	7
55	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	隆帯貼付筋に沈線	37	7
56	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	隆帯を縦方向に把手状に貼付、上面沈線	37	7
57	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	地文縄文、沈線、波状口縁突起	37	7
58	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	隆帯貼付、沈線、波状口縁	37	7
59	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	隆帯貼付	37	7
60	縄文土器	深鉢	包含層 AE5	II	中期	-	-	-	-	口縁部に隆帯貼付、波状口縁、内外面スス付着	37	7
61	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	沈線	37	7
62	縄文土器	深鉢	包含層 AE5	II	中期	-	-	-	-	隆帯貼付	37	7
63	縄文土器	深鉢	包含層		中期	-	-	-	-	破方向の隆帯の筋に沈線、内面にスス付着	37	7
64	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	縦方向の隆帯区画内に矢羽根状の沈線	37	7
65	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	縦方向の隆帯と沈線	37	7
66	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	隆帯区画内に矢羽根状沈線	37	7
67	縄文土器	深鉢	包含層 AJ4	III	中期	-	-	-	-	沈線、刺突	37	7
68	縄文土器	深鉢	包含層 AK3	III	中期	-	-	-	-	破方向の沈線区画、区画内に矢羽根状沈線、内面にスス付着	37	7

表10 土器観察表(2)

掲載番号	種別	器種	出土位置	地区名	層位	分類・時期等	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考	挿図番号	図版番号
69	縄文土器	深鉢	包含層			中期	-	-	-	縄文	37	7
70	縄文土器	深鉢	包含層	AK3	III	中期	-	-	-	隆背の脇に沈線、台部か	37	7
71	縄文土器	深鉢	包含層	AK3	III	中期	-	-	-	縦方向の隆背貼付、台部か	37	7
72	縄文土器	深鉢	包含層	AL3	III	晚期	-	-	-	隆背、沈線、孔有り	37	7
73	弥生土器	壺	包含層	AM3	III	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	付加沈線、ハケ目、頸部	37	8
74	弥生土器	壺	包含層	AL3	III	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	ハケ目後付加沈線付ミガキ、ミガキがある区画と無い区画が交互にある	37	8
75	弥生土器	壺	包含層	AM3	III	不明	-	-	-	ハケ目後ミガキ	37	8
76	弥生土器	壺	包含層	AD5	III	中期中葉(貝田町式)	-	(6.6)	-	ハケ目	37	8
77	弥生土器	小型鉢	包含層	AM3	III	中期中葉(貝田町式)	(6.6)	6.5	5.1	口縁に横方向沈線、沈線下に矢羽根状沈線、脚部下半部に縦方向の柔痕、底部布目压痕	37	8
78	弥生土器	鉢	包含層	AL3	III	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	条痕、横方向沈線	37	9
79	弥生土器	壺	包含層	AM3	III	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	外面条痕、内面刺突	37	8
80	弥生土器	壺	包含層	AM3	III	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	外面条痕、内面刺突	37	8
81	弥生土器	壺	包含層	AM3	III	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	条痕、沈線	37	9
82	弥生土器	壺	包含層			中期中葉(貝田町式)	-	-	-	条痕	37	9
83	弥生土器	壺	包含層	AM3	III	中期中葉(貝田町式)	-	-	-	条痕、外間にスス付着	37	9
84	弥生土器	壺	包含層			中期中葉(貝田町式)	-	-	-	条痕、外間にスス付着	37	9
85	弥生土器	壺	包含層			中期中葉(貝田町式)	-	-	-	条痕	37	9
86	弥生土器	壺	包含層			中期中葉(貝田町式)	-	-	-	条痕	37	9
87	土師器	壺	包含層	AM3	III	古墳	-	-	-	外面ハケ目後板ナデカ、内面板ナデカS字形C型と同時期	37	9
88	土師器	壺	包含層	AM3	III	古墳	(16.0)	-	-	外面ハケ目、S字形状台付壺C型	37	9

東屋位名のうちアルファベットは5cmごとに頭削した人工層位名を示す。すなわち、aは候出面から5cmまでの探さを示す。

表11 石器観察表

掲載番号	器種	遺構名	地区名	層位	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号	図版番号	
12	スクレイパー	SB5	a	下呂石	3.1	4.0	0.9	10.7			18	9	
13	磨石	S11	1	安山岩	(4.8)	(8.6)	(5.4)	245.4	被熱による割れ2ヶ所		21	9	
25	フレイク	SK02	1	チャート	3.2	2.4	1.0	6.4			25	9	
26	フレイク	SK02	a	チャート	3.4	2.7	0.6	4.5			25	9	
27	フレイク	SK02	1	チャート	3.7	3.6	1.1	10.4			25	9	
28	打製石斧	SK02	b	泥岩	(3.5)	(4.0)	(0.6)	9.1	刃部スパール、左下端部残存		25	9	
29	打製石斧	SK02	b	泥岩	9.5	4.7	2.0	111.6	刃部摩耗		25	9	
30	石鎌	SK02	d	砂岩	4.1	3.4	1.3	23.0	打ち欠き		25	9	
38	尖頭器	SK06	a	下呂石	4.1	2.3	1.0	7.9	裏面に主要剥離面残る、時期縄文		30	9	
39	打製石斧	SK07	1	ホルンフェルス	(3.8)	(5.6)	(1.3)	64.5	刃部摩耗		30	9	
51	直線刃石器	SK16	1	ホルンフェルス	3.7	8.2	1.4	36.3	尾崎・野原遺跡でも出土		36	9	
52	U F	SK20	3	黒曜石	2.1	2.2	0.8	2.4			36	9	
89	R F	包含層	AE4	II	チャート	3.4	1.9	0.9	5.2	風化している、ナイフか		38	10
90	尖頭器	包含層	AD5	III	下呂石	3.5	2.2	1.0	5.8	時期縄文		38	10
91	石鎌	包含層		チャート	2.1	1.6	0.6	1.3	有茎鎌		38	10	
92	石鎌	包含層	AK4	III	下呂石	(1.8)	1.2	0.4	0.5	先端折損		38	10
93	石鎌	包含層	AL3	III	下呂石	(1.7)	(1.5)	(0.4)	7.0	先端折損、左脚部折損		38	10
94	石匙	包含層	AC5	III	チャート	2.5	4.3	0.8	4.7	研型、時期縄文		38	10
95	スクレイバー	包含層	AES	II	チャート	4.3	4.1	1.5	23.4	筋理多い		38	10
96	スクレイバー	包含層	AG5	III	チャート	6.8	4.2	1.8	52.6	下端部刃部つぶれ		38	10
97	ビニス・エヌキ-2	包含層	AD5	III	下呂石	3.7	2.8	1.0	10.6	端部つぶれ、左側面に自然面が残る		38	10
98	ビニス・エヌキ-2	包含層	AC5	II	下呂石	4.0	3.0	1.3	13.6	端部つぶれ、表面に自然面残る		38	10
99	U F	包含層	AF5	II	黒曜石	2.3	2.2	0.8	3.1			38	10
100	石核	包含層	AB5	II	下呂石	3.6	5.3	1.6	31.1	石鎌を作ったための素材となった剥片を取った石核		39	10
101	石核	包含層	AE5	III	下呂石	5.4	2.0	3.2	33.5			39	10
102	フレイク	包含層	AJ4	III	下呂石	4.9	2.7	1.4	16.0			39	10
103	打製石斧	包含層		ホルンフェルス	8.4	3.6	1.0	39.6	刃部摩耗		39	10	
104	打製石斧	包含層	AD5	III	ホルンフェルス	(7.1)	(5.6)	1.2	56.7	刃部再生している		39	10
105	打製石斧	包含層	AD5	II	ホルンフェルス	(9.5)	(4.4)	(1.4)	53.3	刃部折損		39	10
106	敲石・磨石	包含層		安山岩	11.9	8.9	6.5	950.0	磨面と蔽き痕有り		39	10	

第4章 総括

今回の調査では、縄文時代の堅穴住居跡、焼窯集積遺構、土坑、弥生時代の堅穴住居跡、土坑、時期不明の土坑、ピット、自然流路などを検出し、約778点の遺物が出土した。本章では、出土遺物として出土遺物の分布、今回の調査区内の遺構として集落の変遷に焦点を絞り、地域史のなかでの当遺跡の位置付けを検討する。

1 出土遺物の分布

出土遺物分布図（図45）からは、時代別に分布範囲が異なっていることが読み取れる。

縄文土器の分布はAK3に最も集中し、126点が出土している。次に多いのがAJ3の19点、AK4の15点、AJ4の14点で、AK3を中心に分布している。これを調査区中央の分布とすると、この他には調査区北と南に分布している。調査区北はAD5で7点出土している。調査区南ではAP2から13点出土している。いずれも調査区中央の分布に比べると少ない。調査区中央の縄文土器出土に関わる遺構はSB1とSK2で、SB1から19点、SK2から58点、これらの包含層から61点出土している。のことから堅穴住居跡は後世の削平をかなり受けているといえる。

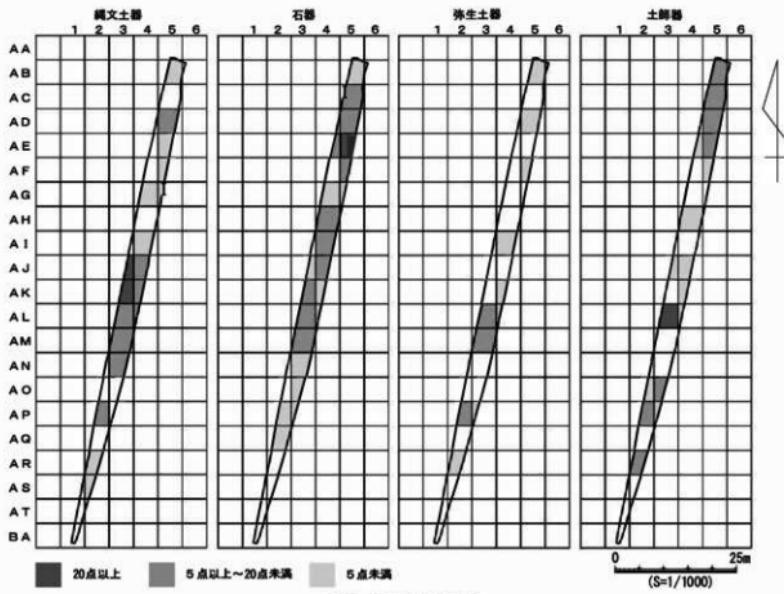


図45 遺物出土分布図

石器は調査区の北と中央の2箇所に多く分布している。調査区北ではAC5・AD5・AE5に集中し、AC5から17点、AD5から27点、AE5から30点、AF5から8点で計82点、石器出土合計213点の38%が調査区北に集中している。この位置にある遺構はSB6・SB7、NR1~3である。いずれの遺構からも出土している遺物は少ないと後世の削平をかなり受けているといえる。調査区北と同じくらい石器の出土が多いのは調査区中央のAH4から17点、AK3から16点、AJ4から12点、AM3から10点、AL3から9点、AI4から5点で計69点、石器出土合計213点の32%が調査区中央に集中している。この位置にある遺構はSB1~5とSI1である。

弥生土器の分布はAL3で15点、AM3で13点、AP2で8点である。この位置にある遺構はSK10~14である。

土師器の分布はAC5で21点、AD5で29点、AE5で9点、AL3で25点、AO3で5点、AP2で10点である。土師器の出土点数合計は151点でその内の110点73%が包含層からの出土である。

須恵器・灰釉陶器・近世陶磁器は細片で、時期を特定できるものが出土していない。須恵器の出土点数は66点と弥生土器に近い点数である。近くにこの時期の遺構がある可能性が考えられ、過去の調査で住居跡等が確認されている。

2 縄文時代から弥生時代の遺構の変遷

(1) 遺構の変遷

縄文時代から弥生時代に属する主な遺構は、図46のとおりである。

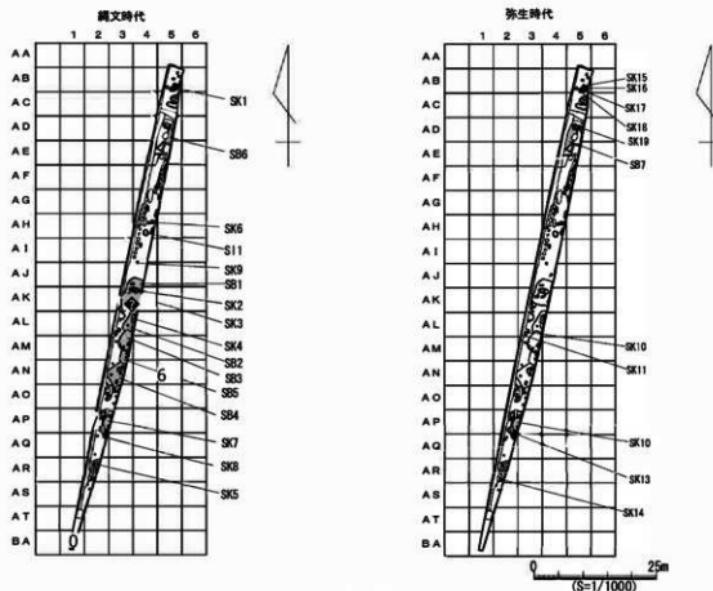


図46 遺構変遷図

縄文時代早期、縄文時代中期と弥生時代中期が主な時代と考える。縄文時代早期の遺構はS I 1、縄文時代中期の遺構は、SB 1～SB 6、SK 1～SK 9である。弥生時代中期の遺構はSB 7、SK 10～19である。それぞれ分布する位置が異なるようである。縄文時代早期はAH 4周辺、縄文時代中期はAM 3周辺、弥生時代中期はAD 5とAP 2周辺である。

3 牧野小山遺跡の遺構変遷

牧野小山遺跡は昭和47年に本発掘調査、平成7年度に試掘・確認調査、平成8年度に本発掘調査が

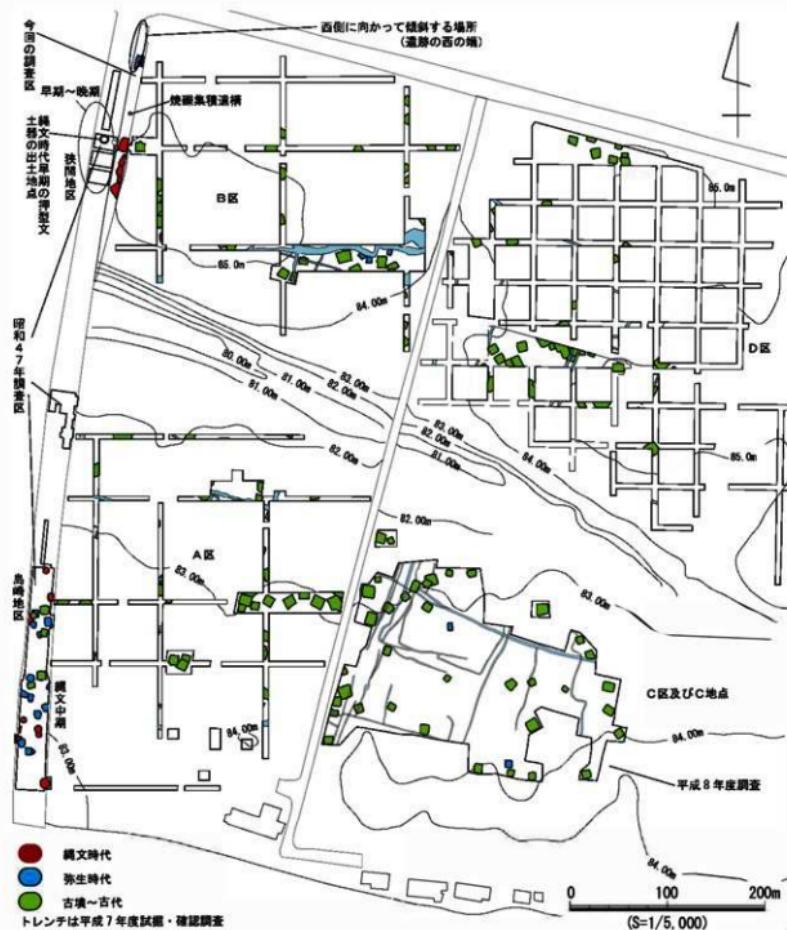


図47 牧野小山遺跡竪穴住居跡の分布

行われている。今回の調査区は昭和47年の調査区に隣接し、平成7年度の試掘・確認調査でのB区に位置している。これまでの調査成果の中に今年度の調査区をあてはめ、時代別の遺構変遷を検討する。

牧野小山遺跡は図47の等高線をみると明らかのように、遺跡のほぼ中央に東西方向の西に傾斜する谷がある。この谷を境にして当遺跡を北と南に大きく分けることができ、北は南に比べて標高が高くなっている。谷が東西方向にあることから、方向としては木曽川によって形成された低位段丘第3面が当遺跡の南で、当遺跡の北は飛騨川によって形成された低位段丘第4面で、当遺跡のある段丘面より一段低くなっていくようである（図3参照）。B区は一番標高が高く、今回の調査区で縄文時代中期の竪穴住居跡が重複して検出された位置にあたる。

牧野小山遺跡全体で遺構変遷を見していくと、縄文時代早期の遺構はB区西側に、縄文時代中期の遺構はA区南西側とB区西側に、縄文時代晚期の遺構がB区西側にある。弥生時代中期の遺構がB区南東側に、5～6世紀の遺構がA区に、7～8世紀の遺構がC・D区にある。時代が新しくなると、飛騨川の河岸段丘寄りから徐々に東へと、更に低い段丘へも集落の位置が変遷していくようである。

＜引用・参考文献＞

可児市教育委員会 1994『川合遺跡群』

財団法人岐阜県文化財保護センター 1996『牧野小山遺跡発掘調査概報』

財団法人岐阜県文化財保護センター 1998『牧野小山遺跡 C地点』岐阜県文化財保護センター調査報告書第39集

財団法人岐阜県文化財保護センター 1993『尾崎遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第13集

財団法人岐阜県文化財保護センター 2000『野笛遺跡I』岐阜県文化財保護センター調査報告書第66集

財団法人岐阜県文化財保護センター 2001『針田遺跡・東坪之内遺跡・田中浦遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第70集

財団法人岐阜県文化財保護センター 2006『上恵土城跡・浦畑遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第101集

財団法人岐阜県文化財保護センター 2007『東野遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第104集
美濃加茂市 1980『美濃加茂市史』通史編

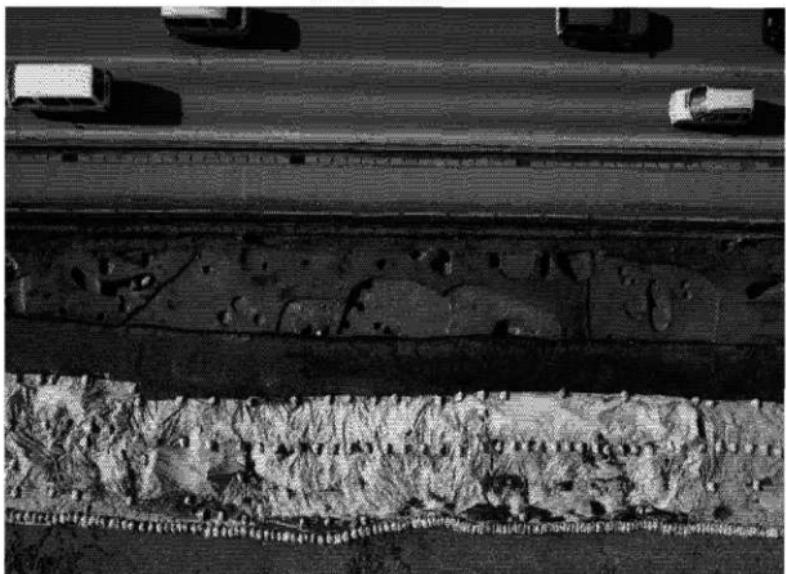
美濃加茂市教育委員会 1973『牧野小山遺跡』県道七宗可児線道路工事埋蔵文化財調査報告書

美濃加茂市教育委員会 1994『大地の生い立ち美濃加茂』

美濃加茂市教育委員会 1995『市民のための美濃加茂の歴史』

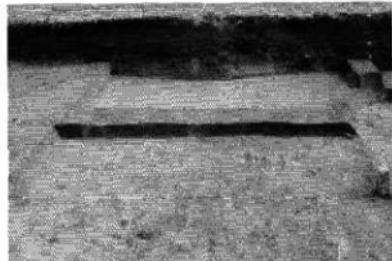


遺跡遠景（北東から）



竪穴住居跡（東から）

図版 2



SB 1 土層断面（西から）



SB 1 完掘状況（北から）



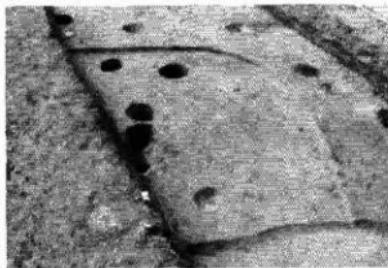
SB 2 土層断面（北東から）



SB 2 完掘状況（南から）



SB 3 土層断面（西から）



SB 3 完掘状況床面有り（北東から）



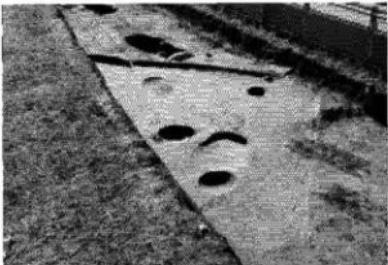
SB 3 遺物出土状況（南東から）



SB 3 完掘状況（北東から）



SB 4 土層断面 (西から)



SB 4 完掘状況 (北東から)



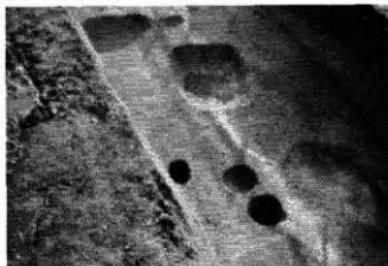
SB 5 土層断面 (西から)



SB 5 完掘状況 (北東から)



SB 6 土層断面 (北西から)



SB 6 完掘状況 (北東から)



SB 7 土層断面 (南から)

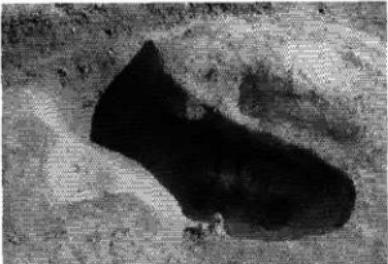


SB 7 完掘状況 (北東から)

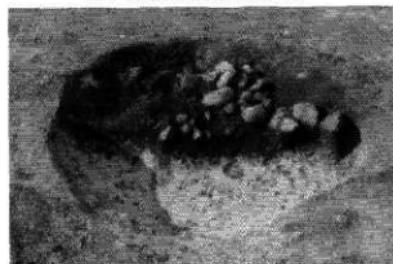
図版 4



S I 1 集石検出状況（東から）



S K 1 完掘状況（西から）



S I 1 土層断面（東から）



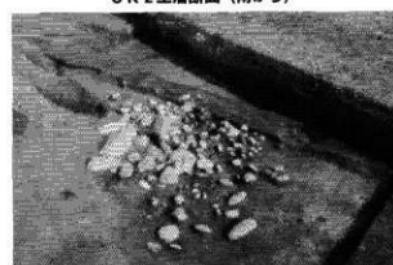
S K 1 付近石匙出土状況（西から）



S K 2 土層断面（南から）



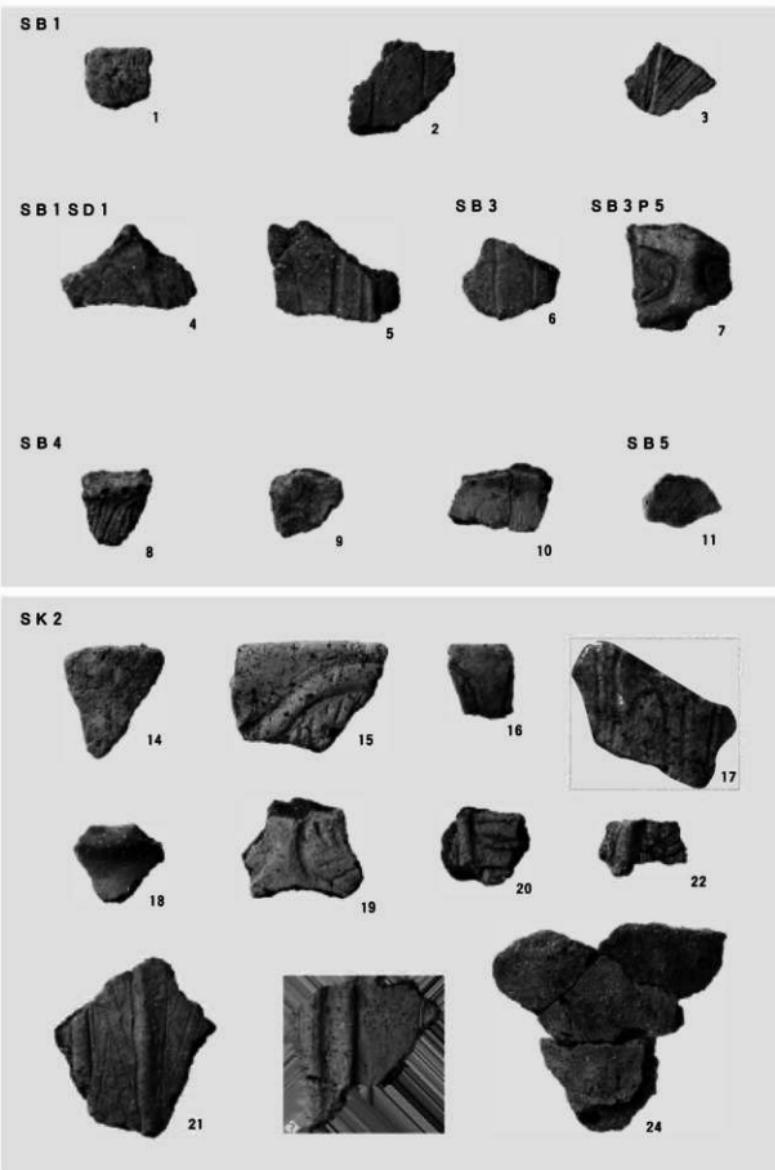
S K 2 完掘状況（南から）



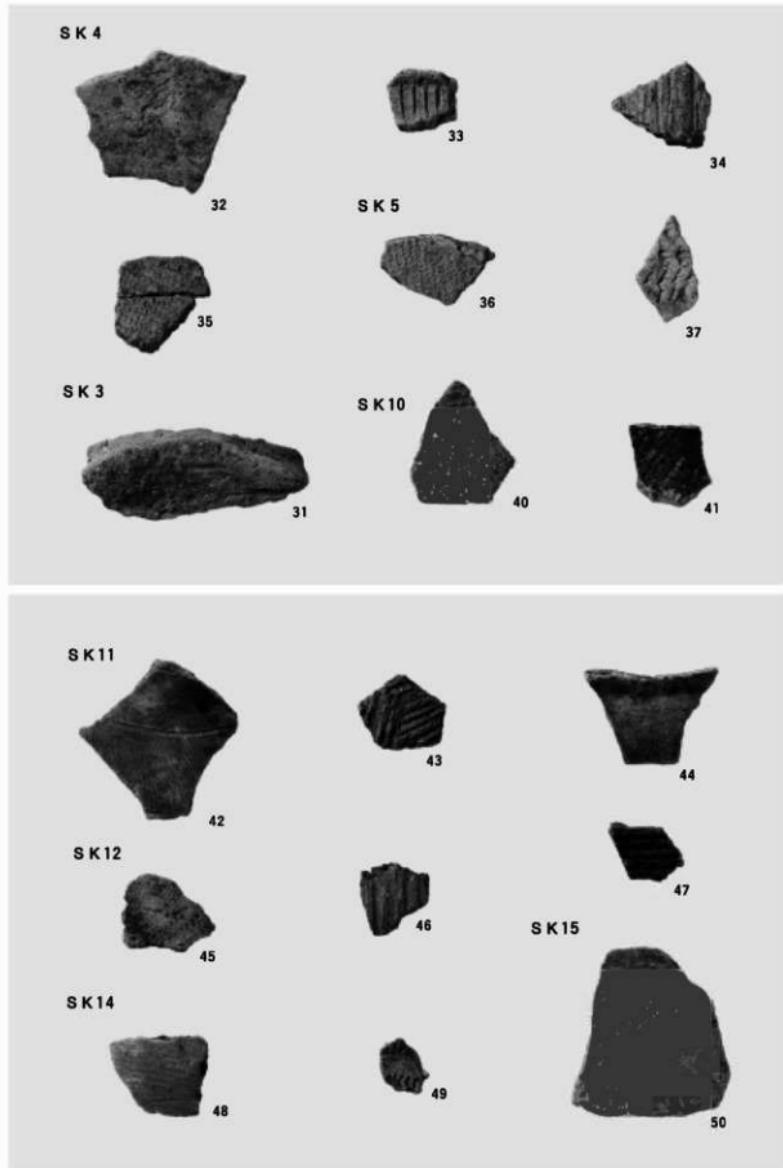
S K 12 石検出状況（南西から）



N R 3、S K 7、S K 54 完掘状況（南東から）



図版6 出土遺物：土器（2）



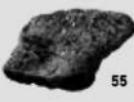
包含層 繩文土器



53



54



55



56



57



58



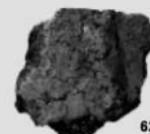
59



60



61



62



63



64



65



66



67



68



69



70



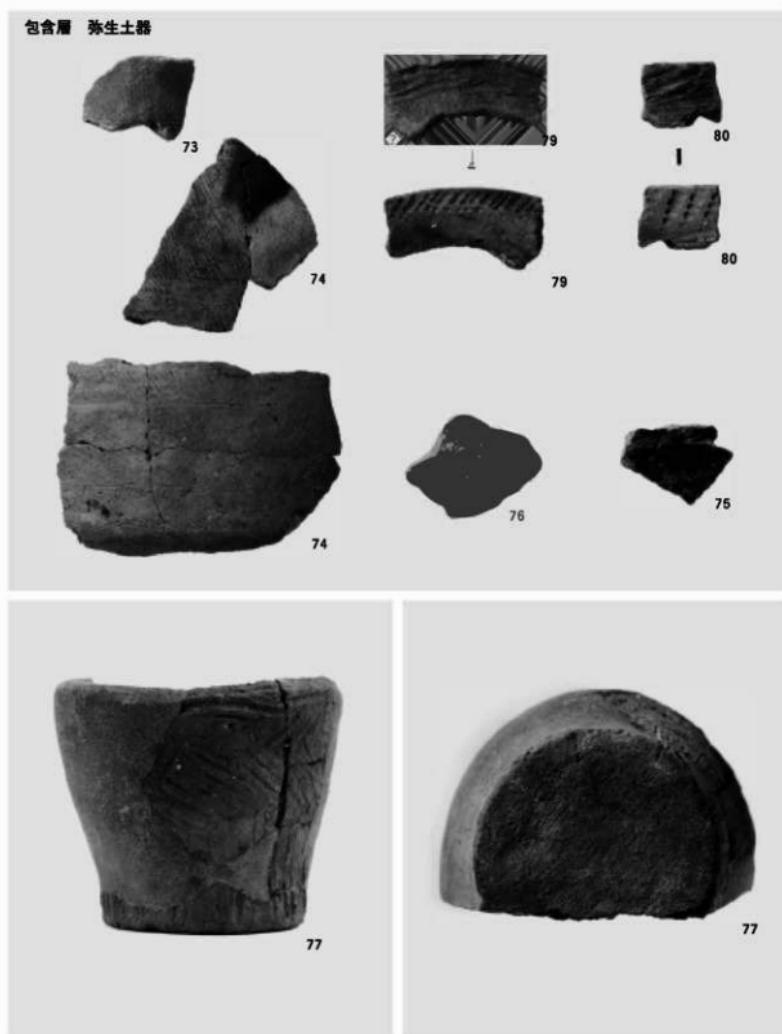
71



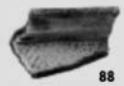
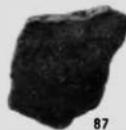
72

图版8 出土遗物：土器（4）

包含层 弛生土器



包含層 弥生土器



S B 5



S K 2



S K 7



S K 6



S K 20



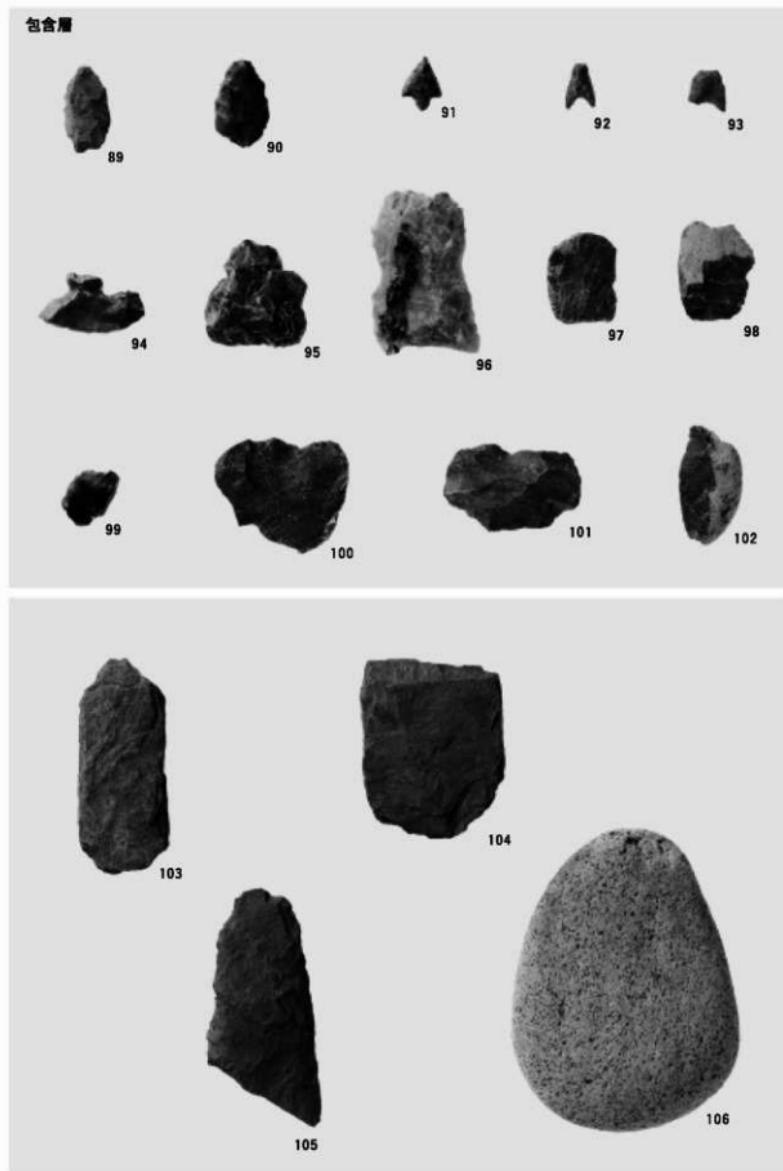
S K 16



S I 1



図版10 出土遺物：石器（2）



報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第123集

牧野小山遺跡

2012年2月10日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社 もとすいんさつ